「魏志倭人伝から見える日本」 注　　塚田敬章

＊1　大事忍男（オホコトオシヲ）

古事記、神代のみで、日本書紀には見えない。知訶島の別名が「天之忍男」となっていて、いくつかの島の別名に天が付けられているが、これは同音の海（アマ）の神格化のための変更と考えられる。知訶島とは五島列島のことだが、一つの海域に、宇久島から福江島まで、多くの島々が近接してコンパクトに押し詰まっている。そういう特長から忍男（オシヲ）という別名が与えられたのではないか。隠伎の三子島（隠岐の島前、一番大きな島後は含まない）の別名が天之忍許呂別（アマノオシコロワケ）、これも三つの島が円形に押し詰まっている。円形というのがコロ（＝転）という音にかかわりそうである。以上から、大事忍男も押す男という可能性が現れる。他、風木津別之忍男神（カザモツワケノオシヲ）という神もいて、屋根の神と思われる大屋毘古神の次に書かれているから風見鶏のような雰囲気がある。いずれも名義未詳とされている。本居宣長の解釈なら、知訶島の「天之忍男」の忍が美称ということになるし、天も美称だから、実体が男しか残らない。

事解之男（コトサカノヲ、コトトケノヲ）

日本書紀、神代の一書にみえる。「唾く神を速玉之男といい、掃う神を泉津事解之男（ヨモツコトサカノヲ）と名づく」としている。約束固めの神が速玉之男で、解消する神が事解之男。二神はセットになって示されている。事解之男に「ヨモツ」という前書きがある。死者の世界に属する神なので、死別の神といって良いだろう。岩波文庫の「古事記伝」はコトトケノヲで、同じ岩波書店の日本古典文学大系、「日本書紀」ではコトサカノヲの読みが付けられており、読みかたも確定できていないようである。私は「コトトケノヲ」と読みたい。「解（と）く」には強い意思がある。

＊2

山海経

成立年代不詳。太古からの伝承を集めたもの。漢の武帝が張騫を西域に派遣することではじめて得られた大夏、月支（月氏）などの知識（史記、大宛列伝）まで含められているから、漢代に現在の形に整理されたことがわかる。解明には謎々を解くような頓知が必要とされる。

楚辞天問

「楚辞」は楚の屈原作とされる詩集(戦国時代末期)。天問は、「大昔の最初のことを誰が伝えたのか？」、「月は何の徳があって、死んではまたよみがえるのか？」など、伝承や自然に関する疑問をうたう。天に対する問いかけである。

淮南子

漢の淮南王、劉安が多数の賓客を集めて書かせた思想書。完成は武帝時代(B.C139)。百科全書的な性格を持つ。

補史記、三皇本紀

唐の司馬貞が史記に付け加えたもの。黄帝以前の太皞伏犠氏、女媧氏、炎帝神農氏などの伝承が記されている。

＊3 怪力乱神

論語・述而　子不語怪力乱神 「孔子は怪、力、乱、神を語らなかった。」

「怪」は奇怪なもの、「力」は超人的な勇力、「乱」は正道を外れた行い。「神」は鬼神や霊魂。

清代に「子不語」(袁枚著)という孔子の語らなかった怪異譚が作られている。

＊4 甲骨文字の発見

紀元前十三世紀から十一世紀に作られた最古の漢字。亀の腹の甲羅や牛、鹿の肩甲骨に刻まれ、占いの内容を記してある。殷代後期の都であった殷墟遺跡から大量に発見されている。

＊5 太史令

●呂氏春秋・先識覧(呂氏春秋は秦の丞相、呂不韋が編纂させたもの。司馬遷は「呂覧」と記す。)

夏太史令終古出其図法執而泣之。夏桀迷惑暴乱愈甚。太史令終古乃出奔如商

「夏の太史令、終古その図法を出し、とりてこれに泣く。夏の桀(王)、迷惑して暴乱な ることいよいよ甚だし。太史令、終古すなわち出奔して商(＝殷)にゆく。」

●竹書紀年(晋代に戦国・魏の王墓から発見された魏の年代記)

太史令終古出奔商(夏后桀二十八年) 「太史令終古、商に出奔す。」

＊6 春秋左氏伝

(「春秋」は魯国の年代記、孔子の編纂とされる。左氏伝は左丘明が注釈を加えたと伝える。司馬遷は「史記」の太史公自序第七十で「左丘は失明して国語あり」と記しているから、左丘明は「国語」の作者とも考えられていた。左丘が正しい名か？)

襄公二十五年(B・C548)

大史書曰崔杼弑其君。崔子殺之。其弟嗣書而死者二人。其弟又書。乃舎之。南史氏聞大史盡死執簡以往。聞既書矣乃還

「太史書きて曰わく、崔杼その君を弑す。崔子これを殺す。その弟嗣ぎ書きて死者二人。その弟また書く。すなわちこれを捨つ。南史氏、太史悉く死すを聞き、簡を執りてゆく。既に書くを聞き、すなわち還る。」

＊7 **通史**

司馬遷は黄帝から始めて自身の所属した漢、武帝時代までのすべての時代を書いている。黄帝以前は蛇神人首、人身牛首など人間離れした伝承なので切り捨てたらしい。

＊8 **史記、太史公自序第七十**

撥乱世反之正、莫近於春秋。春秋文成数万其指数千。万物之散聚皆在春秋。春秋之中弑君三十六亡国五十二諸侯奔走不得保其社稷不可勝数。察其所以皆失基本已。故易曰失之毫釐差以千里。故曰臣弑君子弑父非一旦一夕之故也其漸久矣。故有国者不可以不知春秋。

「乱世をおさめ、これを正しい世に返すのに春秋ほど手近なものはない。春秋の文は数万から成り、その指し示すものは数千である。万物の分散や集合はみな春秋にある。春秋の中で君を弑したのは三十六、国が滅びたのは五十二、諸侯が逃走し、その社稷を保てなくなったものは数えきれない。その理由を考えるとみな基本を失っているのである。故に易経は『ごくわずかな失策が千里の差になる。』という。『臣が君を弑し、子が父を弑するのは一朝一夕に起こることではない。長い時間をかけてゆっくり進行するのだ。』ともいう。故に、国を有する者が春秋を知らないのはよろしくない。」

＊9 **「歴史(上)」**ヘロドトス著(松本千秋訳、岩波文庫)

＊10 **古事記、序**

…於是天皇詔之。朕聞、諸家之賫帝紀及本辞既違正実多加虚偽。当今之時不改其失、未経幾年其旨欲滅。斯乃邦家之経緯王化之鴻基焉。故惟、撰録帝紀封竄旧辞。削偽定実欲流後葉。…

「ここに於いて、天皇は詔された。『私は聞く、諸家のもたらす帝紀および本辞はすでに正実を間違え、多くの虚偽を加えていると。今、その間違いを改めなければ、幾年もたたないうちに真実は滅びてしまうだろう。帝紀と本辞は国家の根源、王化の基本になるものである。これゆえ、帝紀を書き記し、旧辞を調べ、偽りを削って実を定め、後の世に伝えようと思う。』」

ほか、以下のようなことが記されている。

●天武天皇が稗田阿礼に帝皇日継と先代旧辞をよみ習わせた

●和銅四年(711)九月十八日、太安万侶に稗田阿礼がよむ所の勅語旧辞を撰録して献上せよという詔が出る。

●和銅五年(712)正月廿八日、正五位上勲五等、太朝臣安萬侶、古事記三巻を献上。

★和銅四年九月に元明天皇から編纂の詔が出て、五年正月に献上されているから、編纂に要した期間は四ヶ月ほどである。

＊11　日本書紀

●天武紀、十年(681)　三月、川島皇子、忍壁皇子、広瀬王、竹田王、三野王、大錦下上毛野君三千、小錦中忌部連首、小錦下安曇連稲敷、難波連大形、大山上中臣連大嶋、大山下平群臣子首に詔して、帝紀、及び上古諸事を記し定めさせた。大嶋、子首はみずから筆をとって記録した。(稗田阿礼が覚えたものかもしれない)

●持統紀、五年(691)八月、十八氏(大三輪、雀部、石上、藤原、石川、巨勢、膳部、春日、上毛野、大伴、紀伊、平群、羽田、阿部、佐伯、采女、穂積、安曇)に、その祖等の墓記を上進させる。

●九月、川嶋皇子薨ず。

●続日本紀、和銅七年(714、元明天皇)二月、従六位上、紀朝臣清人、正八位下、三宅臣藤麻呂に詔して国史を撰せしむ。

●続日本紀、養老四年(720、元正天皇)五月、一品舎人親王、勅を奉じ日本紀を修む。ここに至り、功成りて紀卅巻、系図一巻を奏上す。

★天武十年に企画され、様々な曲折を経ながら、三十九年後の養老四年に完成したわけである。持統五年に有力氏族の伝承を加え、初期構想から大幅に拡大されている。同年、責任者と思われる川嶋皇子が薨じてから和銅七年まで中断していたのであろうか。舎人親王が責任者になった時期は不明。天平勝宝二年(750)、田辺史難波らに与えられた上毛野君という姓が仁徳紀(五世紀)に登場することから、720 年の舎人親王の献上後も改訂作業が続いていたと考えられる。現在の形になったのはずっと後であろう。

＊12　古老に対するインタビュー

「大化の改新(645)、蘇我入鹿暗殺」現場の臨場感あふれる描写は、生存していた当事者＊、あるいは、いきさつを間近で聞いたその近親者にインタビューした結果得られたものと思われる。改新を主導した藤原(中臣)鎌足の子息が、日本書紀編纂当時の政界トップ、藤原不比等である。

＊日本書紀完成時に当事者が生き残っているとは考えられないが、取材した時期が不明で、当事者からの聞き取りが記録として保存されていた可能性もある。

＊13　日本書紀の困難

伝えたい真実が国家の意思(1、国内の平和、安定を守る。2、古い歴史をもった優れた国であることを中国、朝鮮諸国にアピールする)に反する場合、真実を残しながらも国家の了解を得られる形に変形している。きわめて政治的に配慮された歴史書といえよう。国史の編纂は中国諸史から着想を得たものだが、編纂手法は全く異なっていて、皇族をトップに置き、各政治勢力の代表者が参画するという形をとった。当然、合意に至るまで、さまざまな工作や妥協が積み重ねられることになり、時間がかかると思われる。国内の平和・安定への配慮(国家の意思1)は記にもみられるので、それ以前の帝紀、旧辞がすでにそういう意図のもとに編纂されていたと考えられる。

＊14　日本における考古学の出発点

明治10年(1877)、アメリカ人、モース(東大教授)が東京都品川区の大森貝塚に気づき、発掘調査を行なった。まったく異なった視点から過去を探求できるようになり、考古学の進歩は真実の解明に大きく寄与している。

＊15　中国史書、倭に関する項と編纂者

「漢書地理志第八下、燕地」……後漢、班固(32～92)
「漢書地理志第八下、呉地」…… 〃 〃
「三国志魏書、烏丸鮮卑東夷伝第三十、倭人」…晋、陳寿(233～297)
「後漢書東夷列伝第七十五、倭」……南朝宋、范曄(398～445)
「宋書列伝第五十七夷蛮、倭国」……南朝梁、沈約(441～513)
晋書、梁書、北史、南史、隋書は唐代の作

＊16　百衲本

中華民国の学者、出版実業家の張元済が整理したもの。「日本帝室図書寮の蔵する宋、紹熙刊本(宋、紹熙年間 1190～1194)を借りて写真にうつし、欠けた魏志三巻(最初の三巻)を紹興刊本から補った。」と前書きに書かれている。

紹興本(宋、紹興年間 1131~1162)は紹熙本より数十年古い版本。百衲本は紹興本を参考にして紹熙本を訂正したのか、写真のはずなのに郡支国が都支国に変化している。名前だけ挙げられた多くの国の中の一国で、どこかわからないことに変わりがないから、あまり問題にはなっていない。黥幢という文字が二ヶ所あり、宮内庁本では一つが黥憧となっている。これが黥幢に修正されている。ここは明らかに転写間違いとわかるのだが、郡支から都支への修正、都支が正しいという解釈には何か根拠があったのだろうか？

＊17　倭人伝という表題(小見出し)の付加

紹興本には見られず、紹熙本にある。韓伝には弁辰伝が二つあるが、最初の弁辰伝は辰韓伝の続きなのである。後世の研究者が、わかりやすく引きやすいよう便宜を図ったわけだが、弁辰伝を見誤ってしまったのであろう。紹熙本がそういう形式を採ったのかもしれない。元々の形ではないと思える。晋書斠注にも一行を分けた見出しがあるが、他の書では見られず、まとめて書いてある目的の伝を探すのに時間を取られる。行頭の文字で見分ける形になっている。

＊18　晋書陳寿伝

陳寿字承祚巴西安漢人也　少好学師事同郡譙周仕蜀為観閣令史　宦人黄皓専弄威権大臣皆曲意附之寿独不為之屈　由是屢被譴黜遭父喪有疾使婢丸薬客往見之郷党以為貶議　及蜀平坐是沈滞者累年

司空張華愛其才　以寿雖不遠嫌原情不至貶廃　挙為考廉除佐著作郎出補陽平令　撰蜀相諸葛亮集奏之　領本郡中正撰魏呉蜀三国志凡六十五篇

「陳寿は字、承祚。巴西、安漢の人である。若くして学を好み、同郡の譙周に師事した。蜀に仕え観閣令史となる。宦官の黄皓が威圧力、権力の大きさを専らにして弄び、臣はみな意を曲げてこれに付いたが、寿一人だけが屈しなかった。これにより、しばしば責められ遠ざけられた。父の喪中に病になり、婢に薬を丸めさせた。客が行き、これを見て、土地の人間は陰口をきいた。蜀が平らぐに及び、これに関連して沈滞し年を重ねた。司空の張華はその才を愛し、寿は嫌われがちだが、もとの情はおとしめて捨てるには至らないことをもって、挙げて考廉となし、佐著作郎（中書著作佐郎？）に任命した。出でて陽平令を補佐した（華陽国史は平陽侯相と書いているので陽平は間違いらしい）。蜀相の諸葛亮集を撰し、これを進上した。本郡中正（官名）を率い、魏呉蜀三国志すべてで六十五篇を撰した。」

●華陽国史、後賢志、陳寿

…呉平後　寿乃鳩合三国史著魏呉蜀三書六十五篇号三国志…

「…呉平らぐの後（280 以降）、寿は三国史を集め合わせ、魏呉蜀三書六十五篇を著し、三国志と号した。…」

＊19 **歴史書の文章表現**

歴史書は過去の事実を後世に伝えようと、著作者が信頼し選択した史料に基づいて書かれている。作者の能力、個性から逃れることはできず、誤解や個人的感情が入り込む余地はあるが、自らの想像や根拠のない思いつきをつづったものではない。そのあたりを何か弁別できない研究者がいるようだ。例えば、倭人伝では「…里」という距離を書いていたのに、途中から「水行二十日」という時間表記に変わって違和感をもつが、資料がそう記しているから、陳寿は勝手に修正できないのである。逆に、常識ではあり得ないこの表現の不統一が、引用文であって陳寿の文章ではないことを教えてくれている。

魏志韓伝では、馬韓は魏に滅ぼされたため、国には主帥はいるが王はいない。しかし、「辰王が月支国で（辰韓、弁辰を）統治している。」と訳のわからないことを書いている。データをそのまま使用して、データ間の調整や説明がなされていないため、矛盾しているように見えるのである。この場合、辰王の記述は馬韓が滅ぼされる前のデータと考えられる。

＊20 **邪摩惟音之訛**（百衲本後漢書、宋代の紹興本 1131～1162 を元にしていると前書きにある。）

後漢書集解では「案今名邪摩**推**音之訛反」となっているが、こちらは明末の汲古閣本が元本で、紹興本より 500 年くらい時代が降る。 太平御覧（983）巻七百八十二、東夷三「倭」には、「後漢書曰く」として「倭王居邪馬臺国（倭今名邪麼惟音之訛反）」という記述があり、こちらは百衲本と同じ惟である。（注）内の倭は案の、反は也の誤りと考えられる。 いずれにせよ邪馬壹と邪馬臺は同一国の発音の変化だと捕えていることになる。

＊21 **南朝、宋（420～479）**劉裕が建国。建康（南京）を都とした。

＊22　旧唐書、列伝第三十六、高宗中宗諸子、「章懐太子賢」

上元二年(675)六月、皇太子になる。

(儀鳳元年 676)…賢又招集当時学者太子左庶子張大安洗馬劉訥言洛州司戸格希玄学士許叔牙成玄一史蔵諸周宝寧等注范曄後漢書表上賜物三万段仍以其書付秘閣

「…賢はまた、当時の学者、太子左庶子の張大安、洗馬の劉訥言、洛州司戸の格希玄、学士の許叔牙、成玄一、史蔵諸、周宝寧等を招集し、范曄後漢書に注し表した。高宗の賜い物は三万段。その書を秘閣(＝宮中の書庫)に付した。」

＊23　邪摩惟音の訛

唐詩の韻を調べる。

李白(701~762)　長干行

妾髪初覆額　折花門前劇　郎騎竹馬来　繞牀弄青梅　同居長干里　両少無嫌猜
十四為君婦　羞顔未嘗開　低頭向暗壁　千喚不一廻　十五始展眉　願同塵與灰
常存抱柱信　豈上望夫**臺**　十六君遠行　瞿塘灩澦**堆**　五月不可触　猿聲天上哀
門前遅行跡　一一生緑苔　苔深不能掃　落葉秋風早　八月胡蝶黄　雙飛西園草
感此傷妾心　坐愁紅顔老

「梅、猜、開、廻、灰、臺、堆、哀、苔」「早、草、老」(二種の韻を踏む)

李白と同時代の詩人、常建の「塞下曲四種」のその二では、

北海陰風動地来　明君祠上望龍堆　髑髏皆是長城卒　日暮沙場飛作灰

となっていて、ここでも来、堆、灰の押韻がある。

「牡丹」 李山甫(生没年不詳)

邀勒春風不早開　衆芳飄後上樓臺
數苞仙豔火中出　一片異香天上來
曉露精神妖欲動　暮煙情態恨成堆
知君也解相輕薄　斜倚闌干首重廻

以上の詩に見られるように、「臺」「堆」、来(ライ)、灰(クワイ)、廻(クワイ)、哀(アイ)などを使って韻が踏まれており、臺、堆はどちらも「タイ」という同音だったことがわかる。

唐の顔師古(581～645)が漢書に注を入れいている。その中には半切という方法で文字の発音を記したものがある。○○反とか○○切とか書くわけである。司馬相如伝に、堆は「丁回反」で、発声語の丁(tei)と韻母の回(kai)を合わせて、tai(タイ)という発音だと示されている。だから回と韻を踏める文字は、堆も踏め

る。(「師古曰く、堆は高阜なり。音は丁回反。」)

適(teki)は「丁(tei)歴(reki)」の反、滇(ten)は「丁(tei)賢(ken)」の反。屎(hei)は「歩(ho)丁(tei)」反なので、丁は「tei」であることがわかる。回は「胡(ko)内(nai)」反でカイ(kai)。臺はあまりにもわかりきった文字なのかして、こう発音するという注は見られなかったが、垈(タイ)は臺の異体字で同じ発音である。

年代的には顔師古－章懐太子賢－李白という順になり、顔師古と李白の時代に堆はタイ音だったのだから、中間の章懐太子賢の時代の堆もタイ音で変わらないはずである。

「惟」は「堆」の転写間違いという説があるが、邪馬臺国に対し、「邪摩堆の訛り」という注は同音なので無効である。ここは邪摩惟(ヤバヰ)でなければ注を入れない。

(実際の中国語の発音と日本のアルファベット表記は馴染まないと思えるが、便宜上使用している)

＊24 **隋書俀国伝**

★古田武彦氏は俀をタイと読んでいるが、後漢書には、光武帝の建武中元二年(57)に倭奴国が遣使してきたと書いてある。倭奴が隋書では俀奴になっているから、隋書俀国伝も倭国伝だとわかる。太平御覧巻七百八十二も、「後漢書曰く、俀は韓東南大海中に在り。」と後漢書の倭を俀に置き換えている。「俀」は「倭」の異体字である。翰苑や倭人字碑では、「倭」ではなく、少し異なる文字が書かれていて、幾通りかの異体字があったようである。

餧(ヰ)、餒(ダイ)という文字があり、同じく「飢える」という意味である。委(ダ)と挼(ダ)も「もむ」という意味で同字である。萎(ヰ)、萎(スヰ)も同字。綏(ズヰ)と綏(スヰ)も「冠の紐」という同じ意味を持つ。このようにたくさん見られるのは、元々、異体字だったものが、そう認識されずに、音を変えて現在まで伝わったのか、あるいは、「委」と「妥」を混同して使用するケースが多かったのかということになるだろう。倭は「従う、従順」の意味、俀は「弱い」という意味なので意味的にも通ずる。

煬帝本紀では「**倭国**が遣使して方物を貢いだ」とされている。記録者が異なり、編纂の際に統一を意識されず、そのまま使用されたため、同書内で倭国、俀国と表記が別れたのだと思われる。本紀はおそらく起居注(天子の行動記録)の文書で、俀国伝は外交を司る鴻臚寺の文書を元にしているのであろう。

★隋書には次の文がある。

都於邪靡堆則魏志所謂邪馬臺者也 「ヤビタイに都する。すなわち魏志言うところ邪馬臺である。」

同じ唐代に編纂され、隋書を引用したと思われる北史では同文の邪靡堆が邪摩堆(ヤバタイ)になっているから、隋書の邪靡堆は転写間違いであろう。「堆」という文字が使用されるようになったのは、隋、唐代以降で、日本に渡来した隋の使者、裴世清が報告書を残し、その表記が元になったと思われる。

★隋書の「魏志いうところの邪馬臺である。」という記述から、魏志には邪馬臺国と書いてあった決定的な証拠だとする主張も出るが、疑義があり、このことに関しては紙幅を要するので別項、「邪馬壱国説を支持する史料とその解説」にまとめた。

＊25 **神武天皇の東征**

紀に詳しい。「天磐船に乗り、天孫より先に天降った物部氏の祖先、櫛玉饒速日命が大和を支配していた。九州南部から出た神武天皇が東征し、戦いの後、国を譲られた。」とする。

＊26 **壹與と臺與**

通説は、梁書(唐、姚思廉 557～637 の編纂)や北史が臺與と記すことを根拠に臺與が正しいとしている。

邪馬臺や臺與を記す隋書(邪馬臺)、梁書(邪馬臺、臺與)、北史(邪馬臺、臺與)は、すべて唐の二代目、太宗の時代に編纂されている。隋書代表編纂者は魏徴だが、梁書や北史の編纂者、姚思廉、李延寿も参画している。当時、前王朝の出来事とはいえ、遣隋使が隋を訪れ、裴世清が倭へ渡り、倭の都は邪摩堆であることが明らかになっていた。皆、遣隋使と同時代の人なので、その記憶は鮮明であろう。三人には、「後漢書の邪馬臺が正しく、魏志の邪馬壹、壹與の壹は臺の転写間違い。」という共通認識があったと考えられる。

★太平御覧では、巻七百八十二の東夷三、倭に「臺擧(臺與の転写間違い)」と記されているが、巻八百二、珍宝部一、珠上には、「又(魏志)曰、倭国女王壹與遣大夫率善等献真白珠五十孔青大勾珠二枚也」と記されている。おそらく、歴史的な叙述では太平御覧編纂者の研究による修正の手が入って臺與(臺擧)が採用され、珍宝部では珠に関する記述なので、女王の名は意識されずに、そのまま魏志を転写して壹與になったと思われる。

臺…臺は中央官庁、臺司＝宰相、臺使＝使者の称、臺省＝役所、臺軍＝官軍、臺城＝六朝時代の皇居の称(「大字典」講談社より)

南北朝時代(宋)に記された後漢書が倭の都に(邪馬)臺の字を与えた理由もこのあたりにあるのかもしれない。壹に似ているというだけではなく。

魏は韓と戦ったり敵対していたし、帯方郡使も倭に渡来して戦うなど面倒を押し付けられた。裸足で冠もかぶらず、父子や男女の別もない礼知らず、鬼道に支配され惑わされている倭を馬鹿にもしている。宋代の中国は朝鮮半島から手を引いて、韓、倭とも友好的である。中国へ派遣された使者を通しての交流しかないから、蔑視の感情も薄れていたのではないか。

＊27 **没と滅**

魏志の紹興本では後漢書百衲本(紹興本)と同じ「滅」になっている。但し、後漢書集解(汲古閣本)では魏志の百衲本(紹熙本)と同じ「没」になっているからややこしい。要するに、「滅」と記す魏志もあれば、「没」と記す後漢書も存在するのである。

しかし、魏志が「没」、後漢書が「滅」という形が本来のもののようである。理由は説明可能だが、迂遠になりすぎるので、ここでは取り上げない。

＊28 **「没」**

魏志夫餘伝、「殺人者死、没其家人為奴婢」

魏志毛玠伝、「罪人妻子、没爲奴婢」

＊29 **魏志倭人伝**

…次有奴国此女王境界所盡其南有狗奴国男子為王其官有狗古智卑狗付属女王……女王国東渡海千余里復有国皆倭種

「…次に奴国がある。ここは女王の境界が尽きるところである。**その南に狗奴国がある**。男子を王と為し、その官に狗古智卑狗がある。女王に属さず。……女王国の**東に海を渡ること千余里、また国があり、みな倭種である**。」

＊30 **宋書范曄列伝** 「少好学博渉経史善為文章能隷書暁音律」

＊31 **宋書范曄列伝**

元嘉元年冬……義康大怒左遷曄宣城太守不得志乃刪衆家後漢書為一家之作在郡数年遷長沙王義欣鎮軍長吏加寧朔将軍

「元嘉元年(424)、冬……義康は大いに怒り、范曄を宣城太守に左遷した。志を得ず、すなわち衆家後漢書を(編)纂して一家の作となした。郡にあること数年で長沙王、義欣の鎮軍長吏に遷り、寧朔将軍を加えられた。」（義康＝宋の文帝の弟、彭城王、劉義康）

＊32 **宋書倭国伝**

倭国在高麗東南大海中、世修貢職、高祖永初二年詔曰倭讃萬里修貢遠誠宜甄可賜叙授。太祖元嘉二年讃又遣司馬曹達奉表献方物

「倭国は高麗東南大海の中にあり。代々、貢ぎ物を修めている。高祖の永初二年(421)、詔して曰く。倭の讃は万里、貢を修めた。遠方からの誠、よろしき表れは官位を授けるのが妥当である。太祖元嘉二年(425)讃は、また、司馬曹達を遣わし、**表を奉り**、方物を献じた。」

＊33 **晋書安帝紀**

九年…是歳高句麗倭国及西南夷銅頭大師並献方物…

「義熙九年(413)…この年、高句麗、倭国および西南夷の銅頭大師が並んで方物を献じた。」

【注】

御覧九百八十一義熙起居注曰倭国献貂皮人参等詔賜細笙麝香

「(太平)御覧(巻)九百八十一、義熙起居注曰く、倭国は貂皮人参等を献じた。詔して、細笙、麝香を賜う。」

麝 太平御覧(宋、李昉等編纂)巻第九百八十一 香部一

義熙起居注曰倭国献貂皮人参等詔賜細笙麝香

貂 太平御覧巻第九百十二 獣部二十四

廣志曰貂出夫餘 「広志曰く、貂は夫餘に出る。」

異苑曰貂出句麗国… 「異苑曰く、貂は句麗国に出る。」

★他、貂の産出地としてあげられているのは烏桓、挹婁、遼東、など朝鮮半島北方である。本草綱目では貂鼠、栗鼠、松狗などとされ、「栗、松皮を好んで食べる。」という。「尾大にして黄、黒色。…今、遼東、高麗及び女直、韃靼、諸胡、皆これあり。その鼠、大きさはカワウソの如くして尾は粗い。毛は深く、寸ほど。紫黒色。生えそろっていて光沢はない。」「皮は用いて、皮衣や帽子、襟巻きにする。」「黄色は黄貂となし、白色は銀貂となす。」などと書いてある。

人参 本草綱目(集解)、本草綱目は明の李時珍の著、集解は産出地等の解説。

(別録曰)人参生上黨山谷及び遼東 「別録曰く、人参は上党の山谷および遼東に生じる。」

(時珍曰)上黨今潞州也民以人参為地方害不復采取今所用者皆是遼参其高麗百済新羅三国今皆属於朝鮮矣

「李時珍曰く、上党は今の潞州である。民は人参を地方に害を為すとして決して採取しない。今、用いられているのは、みな遼東の人参である。その高麗、百済、新羅の三国は、今、みな朝鮮に属す。」

＊34 広開土王(好太王)碑

…百残新羅旧是属民由来朝貢而倭以辛卯年来渡海破百残■■■羅以為臣民六年丙申王躬率水軍討利残国軍■■首攻取壹八城、臼模盧城…

「百済と新羅は、昔は属民でずっと朝貢していた。それにもかかわらず、倭は辛卯年(391)に海を渡り来て、百済、■■、■羅を破り臣民と為した。六年丙申(396)、王は自ら水軍を率いて利残国、軍■■首？を討ち壹八城、臼模盧城…を攻め取った。」

●このあと、攻め落とした百済の城、閣彌城などの名を多数書いたあと、百済王が男女生口一千人と細布千匹を献上して服属を誓ったこと、九年(永楽九年＝広開土王時代の高句麗の年号)己亥(399)、百済が誓いを破って倭と通じたこと。倭が新羅を占拠したので、翌年、新羅へ救援軍を派遣したこと、十四年、甲辰(404)、倭が帯方界に侵入したことなどを記している。

●三国史記、高句麗本紀の広開土王の項には、倭に関する記述はみあたらない。三年(392)に百済の関彌城など十一城を抜いたという記述があり、これは広開土王碑の 396 年の記述に対応するのかもしれない。

●三国史記、新羅本紀では、奈勿尼師今三十八年(393)に倭人が来て金城を囲み五日間解かなかったと記されている。これが広開土王碑の倭が侵入し百済、新羅を臣民にしたという 391 年の記述に対応するのか、倭が新羅に満ち、民を奴客としたという 399 年の記述に対応するのか？他にも倭の侵攻があったのか？

★七百年後の十二世紀に編纂された三国史記より、王の偉業を称えるための碑なので潤飾があると思われるが、同時代資料である広開土王碑を重んじるのは当然のことである。

【年表】

広開土王碑

391…倭が侵入し、百済、新羅を臣民にする

（★百残、■■■羅となっていて、読み取れない部分があるが、百残、新羅はもと属民であったという記述から新羅が含まれているのは確実である。百済、新羅、安羅ではないか。）

396…自ら水軍を率い、百済を攻め、閣弥城など多数の城を落とし、百済は服属する。

（★閣弥城は三国史記の関弥城と思われる。）

399…百済は誓いに違い倭と和して通じる。

399…新羅が救援を要請。

400…新羅を救援。男居城から新羅城に到るまで倭がその中に満ちていた。

404…倭が帯方界に侵入したが撃退。

三国史記

392（新羅本紀）…高句麗が強盛なので、伊湌の大西知の子、実聖を質にした。

392（高句麗本紀）…百済を攻め十城を落とす、関弥城を落とす。

392（百済本紀）…高句麗が十余城を落とし、漢水北の諸部落の多くが奪われた。関弥城が抜かれた。

393（新羅本紀）…倭が侵入し金城を包囲

395（百済本紀）…高句麗を討ち、浿水付近で敗れる。

397（百済本紀）…倭と好を結び、太子の腆支を質にする。

401（新羅本紀）…高句麗の人質になっていた実聖が帰国

402（新羅本紀）…倭国と好を通じ、奈勿王の子、未斯欣を質とした。

★上記の年表から、新羅、百済が弱体化し、南の倭と北の高句麗から圧迫されていたことが読み取れる。402 年までに、百済と新羅は倭に質を出している。404 年の記述、倭が帯方界まで進出し高句麗を攻撃するには、そこまでの経路にあたる百済の協力が不可欠である。神功皇后時代、391 年から 404 年まで断続的に戦いが続いていたのである。

＊35　香坂王、忍熊王

敵対した香坂王、忍熊王は仲哀天皇の子、皇后の継子。神功皇后は仲哀天皇の年の離れた後妻と考えられる。

＊36　国名文字表記の韓伝との類似

韓は帯方郡と陸続きで、戦ってもいる。倭よりこちらの情報の方が豊かで国名表記は倭人伝より先立つと思われる。帯方郡使は韓の国名に使用されている馴染んだ文字をそのまま倭の国名に流用したと思われ

る。倭人の発音を中国人の文字で表しており、聞き取りと文字表記という二つの変換過程があるので、微妙な誤差は避けられない。

＊37 **「壹」、「臺」**

唐代に編纂された梁書は臺與と記すが、遣隋使以降で、都はヤマトと判明した後である。魏志の「壹」はすべて「臺」の転写間違いとみた意図的な修正を考えるべきである。

【隋書倭国伝、太平御覧】

後漢書と魏志には記述内容にわずかな違いがあるのだが、隋書は後漢書の記述を採用しており、魏志より後漢書を信頼するという姿勢がみえる。後漢書を引用しながら「魏志いうところの邪馬臺」と記す矛盾がある。

太平御覧は後漢書や魏略、梁書などの記述を交えながら、一括りにして「魏志曰く」と記す引用の不正確さがある。

つまり、両書とも引用者の思考が反映されていて、原典に忠実な引用とは言い難いのである。

＊38 **伊予と大和、「天山」**

伊予国の風土記に曰く、伊予の郡、郡家より東北に天山あり。天山と名づくる所の由は、倭（やまと）に天の加具山（香久山）あり。天より天降りし時、二つに分かれて、片端は倭国に天降り、片端はこの土（くに）に天下りき。因りて、天山という。

★伊予と大和が同格で結びついている。

＊39 **奴の読み**

ひらがな、カタカナの、「め」「メ」は「女」から、「ぬ」「ヌ」は「奴」から生まれた

ドゥ→ド＜漢音＞→ノ（日本）、ドゥ（ヅ）→ヌ＜呉音、日本＞

「篠は小竹なり。これを斯奴（しの）という」（神代紀一書）＝奴は「の」と読まれている。日本書紀では奴はヌ、ノ、ヅ、ド音にあてられる。

＊40 **鮎**

本草綱目では、鰄魚、鯷魚、鰋魚、鮎魚はすべてナマズである。「人魚」は鮎に似て四足ありで、これは山椒魚の類である。神功皇后のアユ占い（神功皇后紀）との関係から、魚と占いを組み合わせた鮎をアユ（年魚）に当てるようになったため、占（デン、ネン）と同音の念を魚と組み合わせ、新たに鯰（ナマズ）という文字を作ったらしい（鯰は国字）。

鮭…本草綱目、「河豚」の項の集解には、鮭の記事も混ぜられており、「鮭肝死人」と書いてある。河豚は江、淮、河みなこれ有りとなっていて、中国には川フグがいる。中国でサケが捕れるのはオホーツク海につながる松花江水系などに限られ、中国にはなじみのない魚で、それを表す文字もなかったと思われる。現在の中国では日本と同じようにサケの意味になっている。

＊41 **衛氏朝鮮**

漢の初代、高祖の時、燕からの逃亡者、衛満が建てた国で、王険（現在の平壌）に都を置いた。孫の衛右渠が漢（武帝）と対立し滅ぼされた(史記朝鮮列伝)。

衛氏朝鮮以前には、殷（商）の貴族、箕氏が立てた箕氏朝鮮が存在した。箕氏朝鮮は周初期から漢初期まで存続したが、衛満に敗れ、南方に逃れて韓を建国。したがって、（馬）韓の王家は箕氏ということになる。これは魏が滅ぼした。

＊42 **帯方郡**

魏志韓伝

「桓霊之末韓濊彊盛　郡縣不能制　民多流入韓國　建安中公孫康分屯有縣以南荒地爲帯方郡　遣公孫模張敞等　収集遺民興兵伐韓濊　舊民稍出　是後倭韓遂属帯方」

桓帝の末と霊帝の末には韓、濊が強勢になり、郡や県は制御することができず、住民の多くが韓国に流入した。（後漢最後の帝、献帝の）建安年間（196～219）、公孫康が楽浪郡の屯有県以南の荒地を分けて帯方郡と為した。公孫模や張敞等を派遣し、遺民を集めて兵を興し、韓や濊を伐ったので、元の楽浪郡民が少しずつ出てきた。この後、倭と韓はついに帯方郡に属した。

★「桓霊の末」は桓帝の末と霊帝の末を合わせた表現で、霊帝中期に「韓濊強勢」という言葉は当てはまらない。そのあたりの読み方に注意！

＊43 **国邑**

魏志韓伝に、「其俗少綱紀國邑雖有主帥邑落雑居不能善相制御」

「その俗は綱紀がすくなく、国邑に統治者がいるけれども、邑落は雑居し、うまく制御することができない。」という記述がある。中国北方には国邑というべきものをもたない遊牧民国家が展開している。それとの対比で、当時の中国人には意味のある言葉だったのだろう。

＊44 **漢書地理志燕地**

「楽浪海中有倭人分為百余国以歳時来献見云」（楽浪海中に倭人有り、分かれて百余国を為す。歳時を以って来たり献見すという。）

漢の武帝は幽州刺史部を設け、楽浪郡はここに属した。中心地は戦国時代の燕の都、薊（現在の北京）である。揚州など十三の刺史部があった。

山海経、海内北経には、「蓋国は鉅燕の南、倭の北に在り。倭は燕に属す。」という記述がある。

＊45　奴国の朝貢

范曄・後漢書の時代（南朝・宋）に、「建武中元二年、倭奴国奉貢朝賀、使人自称大夫」という資料が残っていたということは、百四十年ほど先立つ陳寿の時代にも、当然、残っていたことになる。後漢代の出来事なので、「魏志」には、魏に関係のない過去の事実として「漢の時、朝見する者有り」と簡単に書かれた。范曄は数種類あった後漢書をもとに、新たな後漢書を編纂したとされているから、范曄以前の後漢書の記事ではないか。

＊46　乍南乍東

朝鮮半島南の多島海と呼ばれるリアス式海岸の航海。千七百あまりの島がある。馬韓は帯方群に隣接する交流のさかんな既知の土地なので、「歴韓国」の方向は南とわかっており記す必要がない。魏志韓伝に「韓は帯方の南にあり」と書かれている。

乍＝たちまち。乍南乍東は「たちまち南、たちまち東」だから、方向転換のめまぐるしさの表現である。

「有大蛇呑此獣蛇皮堅不可斫其上有孔**乍開乍閉**時或有光射之中蛇則死矣」（梁書倭伝）

（大蛇がいて、この獣を呑む。蛇の皮は堅くて切ることができない。その上に穴があり、開 いたり閉じたりし、時に、光を発する。この中を射れば、蛇は死んでしまう。）

蛇にイルカか鯨が混ぜられているようである。中国人の体験談ではないのに描写が詳く、資料が新しいと思われる。梁書は唐代の作なので、遣隋使か遣唐使からの伝聞であろう。いたずらっ気のある誰かが酒席で法螺話を伝えたのか、あるいは、そういう妖怪が信じられていたのか？「乍開乍閉」は開いたり閉じたりという意味なので、乍南乍東は南したり、東したりという意味になる。

乍起乍居＝立ったり坐ったり。（顕宗即位前紀注）

乍光乍没＝光ったり隠れたり（持統紀六年）

＊47　倭人伝の「方位」の位置

韓伝

「韓は帯方の南に在り。」

倭人伝（方位が前、行く方法が後に置かれている）

【帯方郡から目的地の女王国までの行程】

「郡より倭に至るには、海岸に従いて水行し、歴韓国。乍南乍東。その北岸狗邪韓国に到る。」（**歴韓国の方向なら「乍南乍東、歴韓国」と書くだろう。**）

「（方位無し）始めて一海を渡る。千余里。対海国に至る」

「また南、一海を渡る千余里。名は瀚海という。一大国に至る。」

「（方位無し）また一海を渡る、千余里、末盧国に至る」

（南岸に向かうのだから、方位は南に決まっているということかもしれない。）

「東南、陸行五百里。伊都国に到る。」

「東南、奴国に至る、百里。」
「東行し、不弥国に至る。百里。」
「南、投馬国に至る。水行二十日。」
「南、邪馬壱国に至る。女王の都とする所。水行十日、陸行一月。」

【女王国到着以降の経験、伝聞】
「その南、狗奴国有り。」
「女王国東、海を渡ること千余里。また国有り。」
「侏儒国有り。その南」
「裸国、黒歯国有り。またその東南に在り。船行一年で至るべし。」
★乍南乍東は方向と方法を同時に書いていることになる。到狗邪韓国に係るわけである。

＊48 **北岸**

南岸に目的地の倭がある。北岸、狗邪韓国から三つの海峡を渡る。海峡も倭に含む計算になっているが、対馬、壱岐は大きな流れの中の飛び石のような存在と考えれば良い。

＊49 **多沙津**

【継体紀】
廿三年春三月百済王謂下哆唎国守穂積押山臣曰夫朝貢使者恆避嶋曲毎苦風波因茲湿所齎全壊无色請以加羅多沙津為臣朝貢津路是以押山臣為請聞奏是月遣物部伊勢連父根吉士老等以津賜百済王。…加羅結儻新羅生怨日本
「二十三年春、百済王が下多利国守（朝鮮半島の日本領）の穂積押山臣に言った。朝貢の使者はいつも岬を離れるたびに波風に苦しんでいます。このため積荷を濡らし、損なって、すべてを見にくいものにしてしまいます。加羅の多沙津を私の朝貢の津路にしてください。このことで押山臣は奏聞した。この月に、物部伊勢連父根、吉士老等を派遣し、（多沙）津を百済王に賜った。…加羅は新羅と同盟を結んで、日本を怨んだ。」
【三国史記地理志】
河東郡本韓多沙郡景徳王改名今因之、領県三、省良県今金良部曲、嶽陽県本小多沙 県景徳王改名今因之、河邑県本浦村県景徳王改名今未詳。
「河東郡は、もとは韓多沙郡。景徳王（在位 742~765）が名を改め今はこれによる。県三を領す。省良県は今、金良部曲。嶽陽県は、もとは小多沙県。景徳王が名を改め今ははっきりしたことがわからない。」
★現在、蟾津江東部は慶尚南道河東郡になっていて、蟾津江西部は全羅南道である。したがって、加羅は慶尚南道になり、百済が全羅南道というぐあいに現在でも行政区域が別れている。蟾津江は国境であっ

た。その蟾津江東岸にあった加羅の良港を百済に与えてしまったため加羅の怨みをかったわけである。ただし、六世紀のことで、三世紀の魏志倭人伝時代の狗邪韓国の領域や港に関しては、加羅側に存在した同じ位置と考えて問題ないと思えるが、データは存在しない。

＊50　地理知識

三世紀の、中国東方のはるかなる辺境地の地理知識が正確だと想定することに無理がある。現在の地図に合わせて考えることで、多くの間違いが生まれている。当時の人々の認識を考えなくては。

＊51　長さの単位

朝鮮半島の狗邪韓国から末羅国まで、海を渡る距離が千里×3で三千里。実際の測量で、こんなにきれいな数字がそろうことは有り得ない。地図を見ると、壱岐-末盧間の距離は明らかに短い。

当時の長さは歩（左右一度ずつ足を出す）や尺という人間の体で測った寸法を基準にしている。正確な測量術は持ち合わせていないので、現在の感覚で語ることは許されない。ましてや、この場合は海上距離である。距離と方位を正確に測定できるなら、正確な地図が作成可能だが、3 世紀半ば、中国本土でもそれは見当たらない。戦乱の時代にそういう作業は不可能であろう。

里はそれのみで存在するのではなく、厘、分、寸、尺、歩、丈、匹というような単位と連動して長さを表す単位体系を作っている。

一寸＝十分の一尺

一尺（前漢 22.5cm、後漢 23.04cm、魏 24.12cm、唐 31.1cm 等。）

★時代が下るにつれ大きくなってくるが、甘粛省で発見された魏の尺骨は 23.8cmで、同じ魏代でも変動があった。度量衡は徴税や商業に必要なので、中央で作り、全国各地に発送された。

一歩＝六尺

一尋＝八尺

一丈＝十尺

一匹＝四十尺

一引＝百尺

一里＝三百歩＝千八百尺＝434.2m ほど（魏代）

里は耕地の面積基準から生まれた単位らしい。漢書食貨志に書いてあること（六尺為歩、歩百為畝、畝百為夫、夫三為屋、屋三為井、井方一里）を計算すると、井が九万歩だから、一里が三百歩＝千八百尺になる。

古田武彦氏などは短里、長里と騒ぐが、中国の文献にそういう記載はない。倭人伝に記された距離が正確だと扱うため、つじつま合わせの無理が必要になるのである。

円仁の「入唐求法巡礼行記」には、

従揚府南行一千四百五十里有台州或云三千余里人里語不定

「揚州府より南行一千四百五十里に台州がある。或いは三千余里という。人の、里の話は定まっていない。」という記述がある。六百年後の、唐代、中国内の距離でも、人により倍以上異なる数字を教えるのである。例として挙げてあるだけで、別に二人の人間だけに聞いたわけでもなかろう、折に触れ、あちこちの距離を尋ねたが、答えがみんなバラバラで、こういう記述になったものと思われる。

＊52 **対馬**

宋代…紹興本(對馬國)、紹熙本＝百衲本(對海國)、明代…汲古閣本(對馬國)

津島

次生津嶋亦名謂天之狭手依比賣

「次に津嶋を生んだ。またの名は天之狭手依比賣という。」(神代記)

参官之船漂泊津嶋乃始得帰

「(百済の)参官の船は津嶋を漂泊し始めて帰ることができた」(敏達紀十二年)

＊53 **海北道**

海北道は、筑紫の宗像郡から筑前大島、沖ノ島を横に見て、対馬北端に至り、さらに朝鮮半島へ渡る航路である。この道筋に宗像三女神が祭られ、道主貴と呼ばれている。

(神代紀)

卽以日神所生三女神者、使降居于葦原中國之宇佐嶋矣。今在海北道中號曰道主貴

「すなわち、日の神の生むところの三女神は、葦原中つ国の宇佐嶋に降り居らせた。今は海北道の中に在り。号して道主貴(みちぬしのむち)という。」

★須佐之男命の刀を天照大神が噛み砕いて吹きだした息吹から生まれた宗像三女神は宇佐に天下ったあと、海北道に移動したことになる。宇佐と親密である。古事記では須佐之男命の刀から生まれたから、須佐之男命の子とされている。

＊54 **脱解尼師今**(新羅本紀)

脱解本多婆那国所生也　其国在倭国東北一千里　初其国王娶女国王女為妻　有娠七年乃生大卵　王曰人而生卵不詳也宜弃之　其女不忍以帛裹卵并宝物置於櫝中　浮於海任其所　往初至金官国海辺　金官人怪之不取　又至辰韓阿珍浦口　是始祖赫居世在位三十九年也　時海邊老母以縄引繋海岸　開櫝見之有一小兒在焉　其母取養之…

「脱解はもと多婆那国で生まれた。その国は倭国の東北一千里にある。初め、その国王は女国の王女を娶り妻としたが、妊娠すること七年で大卵を生んだ。王は人が卵を生むのは不詳だから棄てるように言った。その女は棄てるに忍ばず、卵を布で包み宝物を並べて箱の中に置き、海に浮かべてその行くところにまかせた。初め金官国の海辺に至ったが、金官人は怪しんでこれを取らなかった。また辰韓の阿珍浦口に至った。これは始祖赫居世の在位三十九年である。そのとき海邊の老母が縄で海岸に引き繋ぎ、箱をあけて中を見ると一人の赤ん坊がいた。その母はこれをとりあげて養った。…」

徐偃王(博物志)

徐偃王志云徐君宮人娠而生卵　以不祥棄之水浜　独孤母有犬名鵠蒼　猟於水浜得所棄卵　銜以来帰　独孤母以為異　覆暖之　遂孵成兒生　時正偃故以為名

「徐偃王志はいう。徐君の宮人が妊娠し卵を生んだ。不祥なのでこれを水浜に棄てた。孤独母に鵠蒼という名の犬があり、水浜で猟をし棄てられた卵を得て銜えて帰った。孤独母はおかしなことだと、覆ってこれを暖めた。ついに卵がかえり子が生まれた。時はまさに偃だったので、これを名とした。

★脱解と同じ形の伝承を持つ徐は、淮水流域にあり、春秋時代、呉に滅ぼされた。戦国時には楚領になっている。徐州の徐である。呉と楚に関係しているし、秦と同じ嬴姓である。

＊55　**玉調郷**

●倭名類聚抄　対馬島　上県郡…賀志、鶏知、玉調、豆配(酘)

下県郡…伊奈、向日、久須、三根、佐護

●日本地理志料(邨岡良弼著、臨川書店) 対馬下県郡　玉調 「有高月村、今作上槻」

●風土記編纂の詔勅(続日本紀、元明天皇)

(和銅六年)五月甲子。畿内七道諸国郡郷名着好字。其郡内所生銀銅彩色草木禽獣魚虫等物具録色目、及土地沃堉山川原野名号所由。又古老相伝旧聞異事載于史籍

「(和銅六年 713)五月二日、畿内と七道諸国の郡、郷名は好い字を着けよ。その郡内に生ずるところの銀、銅、彩色、草木、禽獣、魚、虫等のものはつぶさに種類を記録し、土地が肥えているか痩せているか、山川や原野の名称の由来、古老が伝えてきた旧聞や異事を史籍に載せよ。」

この詔勅をもとに「紀→紀伊」、「津→摂津」、「上毛野→上野」等に改められた。

＊56　**上県郡**

倭名抄では現在の下島が上県郡。おそらく都から近い方を「上」、遠い方を「下」と呼んだのであろう。対馬に到るには壱岐から下島へ行くから、こちらが上になる。ただ、延喜式神名帳では、下島の神社と下県郡の神社が一致しており、倭名抄とは矛盾をみせる。後世、上、下の逆転があったのではないか。海北道を通って対馬へ行くのが主流になれば、上島が上県郡になりそうである。

＊57　**卑奴母離**

帯方郡使が「ひなもり」という発音を聞いて「卑奴母離」と表記したのではなく、逆に、魏志倭人伝の記述の奴をナと読んで、後世、「ひなもり」を作り出したのだと思われる。史書では地名としてのみ現れる。(和名抄、景行紀等)、「ヒドボリ」は後世では「ひのぼり」という音になりそうである。

＊58 **対馬の暮らし**

【対馬国貢銀記】、大江匡房（1041～1111）

対馬嶋者在本朝之西極属於太宰府孤立海中四面絶壁……與高麗隔海北■金海府牧野之馬掛帆之布分明亘見其近可推…全無田畝只耕白田或置諸租税至此島以大豆為正税…

「対馬島は本朝の西極に在り、太宰府に属す。海中に孤立し（これは、日本から見れば）、四面は絶壁である。…高麗と海を隔て、北■金海府の牧野の馬や、掛けた帆の布がはっきり見え、その近さをおしはかることができる。…全て田畝はなく、ただ、畠を耕す。諸租税を置くが、この島に至り、大豆を以って正税と為している。」

★混一彊理図の対馬も朝鮮半島のすぐ近くに置かれている。

【海東諸国記】（李氏朝鮮成宗二年（1471）刊行、申叔舟著）

対馬島

郡八人戸皆沿海浦而居凡八十二浦南北三日程東西或一日或半日程四面皆石山土◆民貧以煮塩捕魚販賣為生…山之草木禽獣人無敢犯者罪人走入神堂則亦不敢追捕島在海東諸島要衝諸酋之往来於我者必経之地皆受島主文引而後乃来島主而下各遣使船歳有定額以島最近於我而貧甚歳賜米有差

「郡は八。人戸はみな海浦に沿って住んでいる。およそ八十二浦。南北は三日ほど。東西はあるいは一日、あるいは半日ほど。四面はみな石山で土は（瘠せている？）。住民は貧しく、塩を煮、魚を取って販売することで生活している。…山の草木や禽獣をあえて犯す者はいない。罪人が神堂に逃げ込んでもまたあえて追い捕らえたりしない。島は海東諸島の要衝にあり、諸首長がわが国（朝鮮）に往来する場合は必ずこの地を通過する。みな島主が文書を受け、引き受けてからやって来る。島主は各遣使船から年に一定額を取り立てる。島はわが国に最も近いし、貧しさが甚だしいので、米を下賜するけれども年ごとに違いがある。」

＊59 **「従取之（従いてこれを取る）」**

辰韓の許可を得てという意味なのか、鉄の産出するところを見つけてという意味なのか？

＊60 **梁書倭国伝（唐、姚思廉撰）**

…始度一海海闊千餘里名瀚海至一支國…

「始めて一海を渡る。海は広く千余里。瀚海という名である。一支国に至る。」

＊61 **瀚海**

史記の注は、「群鳥が羽を解く（羽変わりする）」湖なので翰海というと記す。

＊62 **田島神社**

筑前国の宗像大社の所在地名が田島で、そこから祭神を遷したことによると考えられている。

＊63 **宗像三女神**

紀の本文では田心姫、湍津姫、市杵島姫の順に生まれている。

紀の一書では　十握剣…瀛(オキ)津嶋姫命(市杵島姫命)

九握剣…湍津姫

八握剣…田霧姫命(別の一書では田心姫)

記では、田紀理毘売命(＝奥津嶋比売命)、市寸嶋比売命(＝狭依毘売命)、多岐都比売命

以上から「タコリ」又は「タキリ」姫、「イチキシマ」姫、「タキツ」姫の三神とわかるが、矛盾したことを書いていて、誰がどこの神か明らかではない。記、紀の編纂時、すでに失われていたようである。

宗像大社は、沖津宮(田心姫)、中津宮(湍津姫)、辺津宮(市杵島姫)とするが根拠は不明。

京都、松尾大社の祭神は大山咋神と市杵島姫であるが、別名は中津宮姫とされている。

松尾社家系図は壱岐卜部の同族と伝えているので、やはり、市杵島姫は壱岐から、中津宮(筑前大島)へ移動した神と考えられる。

＊64 **壱岐**

倭名類聚抄　壱岐島……壱伎郡(風本、可須、那賀、田河、鯨伏、潮鹵、伊宅、伊周)

石田郡(石田、物部、特通(優通)、篦原)

イツを一と表記しているので、同じ倭人伝中にある壹、伊は音が異なるはず。イー、イ、ヰなどの微妙な違いを表すための工夫と思われる。

西域の月氏国が、山海経海内東経では「月支之国」と表されており、支は「シ」と読む。説文解字でも支は「章移の切」となっており、「シ」である。中国人が中国人のために書いた書物なので、「キ」ではなく、中国人の一般的な発音で読むべきであろう。

65 **一岐島**

【海東諸国記】李氏朝鮮成宗二年(1471)刊行、申叔舟著

一岐島

郷七水田六百二十町六段　人居陸里十三海浦十四　東西半日程南北一日程　志佐　佐志　呼子　鴨打　塩津留分治　有市三所　水田旱田相半土宜五穀　収税如対馬

「郷は七。水田は六百二十町六段。人は陸里十三、海浦十四に住んでいる。東西は半日ほど、南北は一日ほど。志佐、佐志、呼子、鴨打、塩津留に分かれて治す。市は三所にある。水田、畑は半々で、土は五穀によろしい。収税は対馬の如し。」

＊66

浜＝瀕＝ギリギリまで迫る。

魏書何夔伝「遷長廣太守、郡濱山海」（長広太守に遷る。郡は山海に浜す。）

長広は徐州、山東半島の膠州湾。

好捕…魚やアワビを取るのが上手という意味ではなく、魚やアワビを好んで取るという意味である。

＊67 **松浦郡**

倭名類従抄、肥前国、松浦郡…庇羅（ヒラ）、大沼（オホヌ）、値嘉（チカ）

生佐（イキサ）、久利（クリ）

鏡山付近は松浦郡久利郷。

肥前国風土記

昔者　檜隈廬入野宮御宇武少廣國押楯天皇之世　遣大伴狭手彦連　鎮任那之國兼救百濟之國　奉命到來至於此村　卽娉篠原村弟日姫子成婚　容貌美麗特絶人間　分別之日　取鏡與婦々含悲涕　渡栗川所與之鏡緒絶沈川　因名鏡渡

「むかし、宣化天皇の時代、大伴狭手彦連を派遣して、任那の国を鎮め、また百済の国を救援させた。（狭手彦連は）命を受けてこの村に来て、笹原村の弟日姫子に求婚して婚姻した。容貌が美しくきわだっていた。別れの日、鏡を取って婦人に与えた。婦人は悲しんで泣き、栗川を渡ったとき、鏡の紐が切れて川に沈んだ。よって鏡の渡りと名づけられた。」

★鏡、鏡山という地名はこの伝説に基づくのだろうか。しかし、松浦川と鏡山、海の写真を見れば左右対称的で、鏡に映したかのように見える。松浦川の水面も広大で静的で、逆に、この地形から、鏡という地名、この伝説が生まれたのかもしれない。栗川は松浦川の別名。現在も川の東岸に久里という地名が残る。

国には領域という広がりがあるが、末羅国では船を下りて歩いているので、帯方郡使はその中心集落を訪れたと思われる。

対馬国、一大国では、航海の途中なので、都合の良い港を選択したと思われ、中心集落とは限らないであろう。海流や風、時間の都合で航海ごとに変わるかもしれない。

＊68 **怡土郡**

和名類聚抄

筑前国、怡土郡…飽田（アクタ）、託社（タカソ）、長野（ナガノ）、大野（オホノ）

雲須（クモハル）、良人（ヨヒト）、石田（イシタ）。海部（アマベ）

原はハルと読まれるので、クモハルは三雲、井原の辺りであろうという。託社（タカソ）は高祖周辺（日本地理資料）。

★南北に流れる川が郷域を分けているように感じられる。志登神社の古文書に大野肥前守があるというから（日本地理資料）、同じ川に挟まれた領域の曽根、平原は大野郷ではないか。

＊69 **平原遺跡**

曽根遺跡の少し北方の平原遺跡から巨大な国産銅鏡が出土して、伊都国王の陵墓と考えられている。

平成 28 年には三雲・井原遺跡で使用痕のあるすずりが発見され、文字の使用可能性が高まっている。

＊70 **魏略逸文(翰苑)**

到伊都国　万余戸　置(魏志では官)曰爾支　副曰洩渓觚(魏志では泄謨觚)　柄渠觚　其国王皆属女王也(魏志では世有王皆統属女王国)

★太平御覧の引用する魏志は、「有千餘戸」

＊71　**筑前国(和名類聚抄)**以下の郡、郷が奴国の領域と考えられる。

早良郡…毘伊、能計、額田、早良、平群、田部、曽我

那珂郡…田来、曰佐、那珂、良人、海部、中島、三宅、山田、坂引

席田郡…石田、大国、新居

糟屋郡…香椎、志阿、厨戸、大村、池田、安曇、柞原、勢戸、敷梨

＊72 **後漢書倭伝「倭奴国」**

建武中元二年　倭奴国奉貢朝賀　使人自称大夫　倭国之極南界也　光武賜以印綬

「建武中元二年(57)、倭奴国、貢を奉り朝賀す。使人は自ら大夫を称す。倭国の極南界なり。光武賜うに印綬を以ってす。」

＊73 **筑前国、志摩郡(倭名類聚抄)**

韓良、久米、登志、明敷、鶏永、川辺、志麻

＊74 **火徳**

漢書高帝紀第一下

漢承堯運　徳祚已盛　断蛇著符　旗幟上赤協于火徳　自然之応得天統矣

「漢は(帝)堯の運を承け、徳祚はすでに盛んで、蛇を断ちて符を著け、旗幟は赤を上として火徳にかない、

自然の応(たすけ)により天の統(流れ？)を得る」。

★金印の一辺はほぼ2．3cmで、これは漢代の一寸。

＊75　金印出土状況

志賀島村庄屋武蔵による「志賀島村百姓甚兵衛申上る口上之覚」という甚兵衛の口上書が黒田藩郡役所に届けられている。金印発見が人の噂にのぼるようになり、金は幕府の統制品なので、放置しておくと甚兵衛が罪に問われかねない。災いは自分たちに及ぶかもしれないと恐れて、甚兵衛を説得したのであろう。

地元の寺などに残された資料から、百姓甚兵衛が田の溝の修理を依頼した秀治、嘉平の二人が発見したという説が有力なようである。田は志賀島村の村域に存在したことになる。

三個の石で箱のような囲いを作り、上に二人で持ち上げなければ動かせないような大石で蓋をしたという形らしい。大事に扱い、隠すという行為が想定できる。それ以来、金印は動いていない。現在、発見地は金印公園として整備されているが、正面に能古島が見え、それを目印の一つにしたのだと思われる。

＊76　打昇浜(海の中道)

筑前国風土記曰糟屋郡資珂嶋昔者気長足姫尊幸於新羅之時御船夜時来泊此嶋有陪従名云大浜小浜者便勅小浜遣此嶋覓火得早来大浜問云近有家耶小浜答云此嶋與打昇浜近相連接殆可謂同地因曰近嶋今訛謂之資珂嶋

「筑前国風土記に曰く。糟屋郡、志賀島。昔、オキナガラタラシ姫の尊(神功皇后)が新羅にお出でになった時、御船が、夜、この島に来て泊まった。お供がいて、大浜、小浜という名である。小浜をこの島に行かせて火を求めさせたが、手に入れてすぐに戻って来た。大浜が『近くに家があるのか』とたずねると。小浜は『この島と打昇浜は近くて相連なり、ほとんど同じ土地だと言って良い。』と答えた。因って近島と言ったが、今は訛って志賀島という。」

★打昇浜にある民家で、火を手に入れたということらしい。

＊77　官名の違い

官名が国ごとに異なっているし、後漢書には「国は皆王を称し世世伝統」という記述があるので、後漢時代、各国は独立していたと考えられる。

＊78　筑前国、宗像郡、安曇郡(倭名類聚抄)

宗像郡

秋、山田、怡土、荒自、野坂、荒木、海部、席内、深田、蓑生、辛家、小荒、大荒、津九

糟屋郡

香椎、志阿(志何か？)、厨戸、大村、池田、安曇、柞原、勢門、敷梨

＊79 **安曇氏**

新撰姓氏録

安曇宿祢……海神綿積豊玉彦神子、穂高見命の後（右京神別下）

安曇犬養連…海神大和多罪命三世孫、穂己都久命の後（摂津国神別）

安曇連……綿積神命皃、高見命の後（河内国神別）

古事記

安曇連等は綿津見神の子、宇都志日金拆命の子孫

＊80 **湊川**

砂浜海岸で水深が浅く、帯方郡の大船は入れないであろう。以降は倭船に乗り換えての航海である。

＊81 **室津**（播磨国風土記、揖保郡、浦上の里）

室原泊（むろふのとまり）

室と号する所以（ゆえ）は、この泊、風を防ぐこと室の如。故、よりて名と為す。

摂津五泊（行基による）

川尻（尼崎）、大輪田（兵庫）、魚住（明石）、福泊（姫路）、室津

★西国大名の参勤交代に利用され、江戸時代には室津千軒と呼ばれるほどの繁栄をみせた。港の入口にある加茂神社は創建二千年と号する古社である。

＊82 **鞆**

備後国、沼隈郡…津宇、赤坂、春部、諫山

鞆の郷域は不明。津宇郷と思われる芦田川流域の津之郷町から、「新」の王莽時代の貨幣、貨泉が出土している。このあたりが中心だったのか？

★草戸千軒遺跡は芦田川の洪水により埋もれたもので、川の中州から発見された。

★景行紀二十七年に、害心のある「吉備穴済神（あなの渡りの神）」という記述があり、芦田川河口部には大和朝廷に敵対する有力豪族が存在したことを示している。

備後国安那郡、深津郡（倭名抄）→深安郡→現在は福山市

吉備穴国造（先代旧事本紀、国造本紀）

纒向日代朝（景行天皇）御世、和邇使主同祖彦訓服命八千足尼定賜国造

＊83 **関門**

夫筑紫国者、遐邇之所朝届。去来之所関門（宣化紀）

「それ、筑紫国は、遠く近く（の国）がやって来るところであり、往来の関門となるところである。」

＊84　**放射式記述説**

放射式記述説では、投馬国と邪馬壱国はどちらが遠いのか？二国は同じ南にあるけれども、水行の差の十日と陸行一月を比べることになる。どちらが遠いか、近いか。そのあたりがあいまいになる。邪馬壱国へは、水行で二十日行ってから、陸行に切り替えた方が早く着けそうに思う。

東と南があってこその東南なのに、東南の奴国を最初に書き、東の不弥国、南の投馬国、邪馬壱国という紹介の順序も不自然である。

私が高校生のとき、「こんなアホくさい書き方、俺でもせんわ。」と思ったものである。なんの断りもなく書いたところで理解されるはずがない。読み手に配慮しない、高校生にも馬鹿にされる程度の文章力、発想ということになる。それを容認する大学教授とは？ 古田武彦氏の短里説、二倍年略に関しても同じことがいえる。帯方郡使やそれをチェックする陳寿の文章力をどう考えているのだろうか。自らの想定に合わせるため、読み方を捻じ曲げようと工夫を重ねなければできない読み方なのである。思いつくまで時間がかかったであろう。普通に読めば簡単で、間違った想定につじつまを合わせようとするから無理が生じる。

＊85　**至と到**

至と到には微妙な区別があると思われる。至には極まる意味があり、到はそれに刀が加えられた形なので、ゆっくり曲がりながらか、あるいは、細かく刻みながら至ることである。そこから推測すると、到は時間の経過や待望感などを内に含む。至はそれを考慮しないということになりそうである。

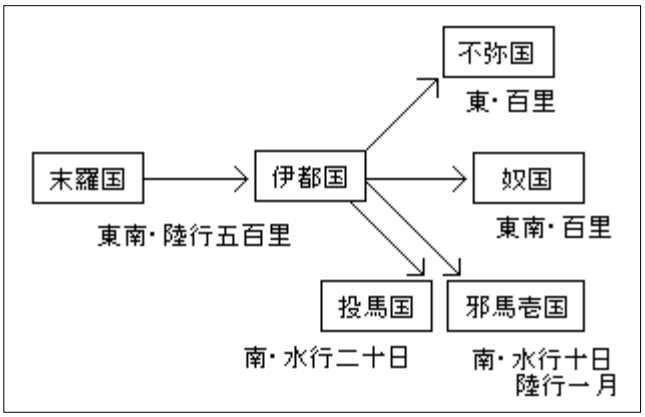
＊86　**隋書俀国伝**

夷人不知里数但計以日其国境東西五月行南北三月行各至於海其地勢東高西下

「夷人は里数を知らない。ただ、日を以って計っている。その国境は東西五ヶ月行程、南北三ヶ月行程でそれぞれ海に至る。その地勢は東が高く、西が低い。」

＊87　**再び放射式記述説の否定**

「女王国より以北は道の里程を略載できる。」と記しており、女王国から対馬国まで線上に並んでいたことを示している。



放射式記述説では 伊都国が中心になり、女王国から北へ、陸行一月、水行十日で伊都国に着き、また同じ南の投馬国へ水行二十日戻るという扱いになり、女王国(邪馬壱国)からは道里をたどれない。放射式記述説はここでも否定される。

＊88 (奴国)極南界＝女王の境界の尽きる所

「建武中元二年云々」という記述自体は後漢書倭伝に見られる。宋書范曄列伝に、范曄は「衆家後漢書を刪し一家の作となした」と記されており、宋代には、まだ、後漢の資料がたくさん残っていた。そこから得たものであろう。「建武中元二年倭奴国奉貢朝賀使人自称大夫倭国之極南界也光武賜以印綬」

范曄は魏志倭人伝の地理・風俗情報を引用するのみで魏との交流に関する記述は無視している。これは後漢という時代の歴史を書いているからで、過去は書けるが、未来は書くこと出来ない。地理、風俗に関しては変わりがないという判断である。

逆に陳寿は後漢代の情報に重きを置かないため、魏代の倭と無関係な光武帝の印綬下賜の記録が見えない。このことは、百五十年ほど時代の降る范曄が読んでいるのだから、陳寿も目にしていたはずで、「後漢代に朝貢する者がいた」と記している。その知識が「女王の境界尽きる所」の奴国となって現れたと考えられる。

卑弥呼は両時代にまたがるので、どちらにも記された。両書の立場の違いが認識されていないのは問題である。

＊89 紀伊と淡路

淡路島は現在は兵庫県だが、古代は南海道に属し、紀伊、淡路、阿波、讃岐、伊予、土佐の六国で構成されている。

先代旧事本紀、国造本紀

紀伊国造…神皇産霊命五世孫天道根命定賜国造

淡道国造…神皇産霊尊九世孫矢口足尼定賜国造

紀伊と淡路の首長は同系である。

＊90 高津

難波で統治した孝徳天皇の蝦蟇(カハヅ)行宮が「紀」に見られ、タカツではなく、コーヅと読む。

＊91 コウチヒコ

翰苑

魏略曰女王之南又有狗奴国女男子為王其官曰拘右智卑狗不属女王

★狗古智卑狗を「キクチヒコ」と読む人がいるが、狗をキと読むなら「キクチヒキ」、コと読むなら、「コクチヒコ」と読むべきで、首尾一貫していない。

★太平御覧では狗石智卑狗。石、古と変化するなら、原型はやはり右であろう。
狗邪韓国（魏志）、拘邪韓国（後漢書）

＊92 **入れ墨**

隋書俀国伝に「男女多黥臂點面文身」という記述がある。この記述に従えば、隋代でも、二の腕に入れ墨し、顔に小さな点々（目の周りか）、体に模様の入れ墨をしていた者が多いことになる。隋の使者、裴世清の報告に基づく記述と考えられ、信憑性の高いものである。
★古事記は大久米命が目の周りに入れ墨していたことを記している。（神武記）
★顔に入れ墨らしき模様の入った埴輪がたくさんある。
★明治初期の東京湾の船頭の描写に次のようなものがある。
「皮膚はとても黄色で、べったりと怪獣の入れ墨をしている者が多い。」（「日本奥地紀行」イザベラ・バード著）

＊93 **好**

「好」は好むという意味。好んで水に入る頻度が多いため、水中での害を避ける入れ墨を必要としたのである。

＊94 **越人の入れ墨**

史記越王勾踐世家第十一
越王勾踐其先禹之苗裔而夏后帝少康之庶子也封於会稽以奉守禹之祀文身断髪披草莱而邑焉後二十余世至於允常
「越王勾踐、その祖先は禹の苗裔にして、夏后帝、少康の庶子である。会稽に封ぜられ、禹の祀りを奉守した。文身断髪し、草の荒れ地を切り開いて邑をつくった。後、二十余代で允常に至る。」
★注に「無余」という名があるが、実名ではないであろう。識別記号のようなものである。
「越人は箴（はり）を以って皮を刺し、龍文を為す。これに尊栄を為すゆえんなり。」（淮南子泰族訓・許信注）
「常に水中に在り。ゆえに其の髪を断ち、その身に文し龍子に象る。ゆえに傷害を見ず。」（漢書地理志粤地・応劭注）

＊95 **会稽、東治**

「会稽」は春秋時代の越王勾踐の都（現在の紹興市）
「東治」は漢代の閩越の都（現在の福州市）

＊96 **帯方郡の冬の寒さ**

ソウルの一、二月の平均気温は氷点下である。それより北（現在は北朝鮮領）にある帯方郡はもう少し寒いはず。緯度は山形県あたりに該当する。漢江が凍結するような時期に航海に乗り出すとは考えにくい。

＊97　**論衡**（後漢、王充）

周時天下太平越裳献白雉倭人貢鬯草（儒増篇）

「周の時、天下太平、越裳は白雉を献じ、倭人は鬯草を貢ぐ。」

成王之時越常献雉倭人貢暢

「成王の時、越常は雉を献じ、倭人は暢を貢ぐ。（恢国篇）」

★鬯草とは鬱金（ウッコン）草（＝ウコン）。黒キビの酒に入れて香りをつける。におい酒を作るための香り草。日本では奄美大島、沖縄に自生するという熱帯、亜熱帯系の植物である。倭人がこれを献じたという伝承は、日本を南方（熱帯、亜熱帯）の国と誤解させ得る。

＊98　**九十度の狂い**

間違った方向に規律があるということは、移動前に倭人が指し示した方向を推定したのではないか？直線路など存在しないから、一日の移動の後に、現在の位置は昨日の位置から見てどの方向に当たるか、一度きりの経験で、引き出すのは不可能と思える。

＊99　**会稽郡、東鯷人**

会稽郡…漢の武帝以降、漢代の中国東南海岸部は全て会稽郡に含まれる。

会稽海外有東鯷人分為二十餘国以歳時来献見云（漢書地理志呉地）

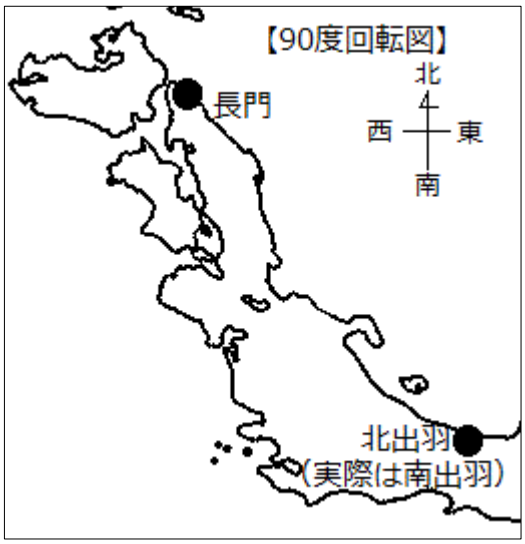
★黄雅曰鯷（音提）鯷（音逓）鮎也（太平御覧）　★鯷の音はテイ。鮎はナマズ

＊100　**入唐求法巡礼行記**

八日新羅人王請莱相看是本国弘仁十年流着出州国之唐人張覚済等同船之人也問漂流之由申云為交易諸物離此過海忽遇悪風南流三月流着出州国其張覚済兄弟二人臨将発時同共逃留出州従北出州就北海而発得好風十五箇日流着長門国云々頗解本国語

「八日、新羅人、王請来たり相看る。これ、本国弘仁十年、出州国に流着の唐人、張覚済等と同船の人なり。漂流の由を問う。申して云う。諸物を交易するためここを離れ、海を過ぐるに、たちまち悪風にあい、南に流されること三月、出州国に流れ着く。その張覚済兄弟二人は将に発する時に臨み、同じく共に逃げて出州に留まらんとす。北出州より北海に就きて発し、好風を得て十五ヶ日にして長門国に流着すと云々。すこぶる本国語を解す。」

★北出州は、この場合、出羽の南端と考えられる。山形県酒田市あたりか。



と

＊101 楮(こうぞ)

幽州人謂之穀桑或曰楮桑、荊揚交廣謂之穀、中州人謂之楮、殷中宗時桑穀共生是也、今江南人績其皮以為布又擣以為紙謂之穀皮紙、長数丈潔白光輝其裏甚好其葉初生可以為茹

「幽州人はこれを穀桑といい、或いは楮桑という。荊州、楊州、交州、広州はこれを穀という。中州人はこれを楮という。殷、中宗の時、桑穀ともに生ずはこれなり。今、江南人はその皮を績(う)み、以って布と為す。また、打ち、以って紙と為す。これを穀皮紙という。長さ数丈、潔白で光輝き、その裏は甚だ好し。その葉、初めて生ずるは以って茹と為すべし。」

＊102 職貢図に書かれた文字

倭国使

倭国在帯方東南大海中依山島居　自帯方循海水乍南乍東■其北岸　歴三十余国　可万余里　倭王所■■在会稽東　気暖地温　出真珠青玉　無牛馬豹羊鵲　■■■面文身　以木綿帖首衣横幅無縫■■

以下は剝落して文字が見えない。

＊103 被髪

捜神記に、秦の時の武都故道での話として、「有騎堕地復上髻解被髪」

「騎馬武者がいて、地に落ち、また馬に上がったが、髷が解けて被髪になった。」という記述がある。

＊104 米作の広がり

農業学校はないから、米作りが短期間で日本中に広まったのは、ノウハウのすべてを知っている人間が籾を携えて日本中に散らばったということになる。かなりの人数が必要だと思われる。

苗代を作ってある程度育て、田植えをして移植するという形でなければ、稗などの競合植物に負けるという。ずいぶん前に、モミの直播きの実験の話を耳にしたが、その後の話題を聞かないから、成功していないのだろう。弥生時代の田植えが考古学的に明らかになってきている。米作は最初から苗代を必要としていたのである。その他、様々なノウハウは口伝えだけで効果を出せるものではあるまい。人がいなければ。

東北でも縄文時代の水田が発見されているというから、現在の B.C300 頃を境界とする縄文、弥生の時代区分も明らかにおかしい。新しい農業文化はもっと早くから広まっていた。

＊105 家畜

羊なら当時の船でも運べると思えるのだが、倭人は羊肉や羊毛を必要としない民族だったようである。ずっと後もそのままなので、江上波夫氏の騎馬民族征服説は否定される。衣、食、住の文化のすべてに渡って騎馬民族の要素が残っていない。入っているのは馬とその関連品(ズボン等)だけである。

日本に馬が入ったのは神功皇后時代(391 以降)で、古事記に、新羅を馬飼いにしたと記されている。百済では、馬は葬儀用で乗馬に使っていない(魏志韓伝、馬韓)。

三国史記、新羅本紀の始祖、赫巨世の五十三年(B.C5)に「東沃沮の使者が来て、良馬二十匹を献じ

た。」と記されており、新羅（辰韓）は、馬韓と違って、北方の国から乗馬などの技術をはやくから採り入れていたことがうかがえる。

★神功皇后の実在を認めなければ日本の古代史は解けない。

＊106 矛

「矛」は槍型。「戈」は柄に直角に刃を差し込んだもの。鎌のような形になる。「戟」は枝別れのあるホコ。

＊107 交阯（ベトナム北部）も倭と同じ風俗

漢武帝誅呂嘉開九郡設交阯刺史以鎮監之山川長遠習俗不斉言語同異重譯乃通民如禽獣長幼無別椎結徒跣貫頭左衽（呉志薛綜伝）

「漢の武帝は呂嘉を誅し、九郡を開いて交阯刺史を設け、これを鎮め見張らせた。山川は長く遠く、習俗は等しくない。言語も同じく異なり、訳を重ねて通じた。住民は禽獣のようで、長幼の区別はなく、椎結して裸足で、貫頭し左衽である。」

★海南島（儋耳・珠崖）に近い中国南部（交阯郡、現在はベトナム）でも、倭人と同じように椎髻（みづら）、徒跣、貫頭という習俗である。長幼の別がないのも倭人伝に記されている。貫頭に左衽と書いてあるのは上着を着ていたということなのか？

魏志は「有無する所は儋耳、珠崖と同じ」と記しているが、例として挙げただけで、ベトナム北部にもよく似た習俗の民族が展開していた。

＊108 馬韓の家

魏志韓伝（馬韓）

居處作草屋土室如冢其戸在上

「居所は草の屋根、土の部屋を作り、墓のようである。その戸は上にある。」

土の壁があって、屋根が草で覆われていた。三角形に尖った屋根ではなく、傾斜の緩やかな丸いもので、冢（土を盛り上げた墓）のように見えるということらしい。

★日本の家屋文鏡にはね上げ式の戸を描いたものがある（上図）。家の形は全く違うが、「戸が上にある」というのは、この形ではないか。

＊109 若者組

現在の青年団の母体となった組織で、文献的に遡れるのは江戸時代初期までという。幕藩体制の江戸時代にいきなり広範囲に組織化されたとは考えられず、古くからの村落共同体に根差した土俗的風俗であろう。江戸時代になって顕在化したものと思われる。

継体紀にある話だが、反乱を起こした筑紫国造磐井は、近江の毛野臣に対して、「今は使者となってい

るが、昔は我が伴として、肩をすり、肘をすり、同じ釜の飯を食っていた。俺を従わせることなんてできないよ。」と言い放っている。人質のようなものかもしれないが、豪族の子弟たちを都で共同生活させて教育する機関が設けられていたと想像させる。その土台として若者組という村落共同体の風俗が存在したのではないか。

＊110　隋書地理志「楊州」

揚州於禹貢為淮海之地　在天官自斗十二度至須女七度為星紀　於辰在丑　呉越得其分野
江南之俗　火耕水耨食魚與稲　以漁猟為業　雖無蓄積之資　然而亦無饑餒　其俗信鬼神好淫祀　父子或異居　此大抵然也

「揚州は禹貢に於いては淮、海の地となす。天官に在りては斗十二度より須女七度に至り、星紀となす。辰に於いては丑にあり。呉越がその分野を得る。

江南の風俗は、火で耕し、水で草切る。魚と稲を食べ、漁猟をもって生活手段としている。蓄積の資財はないが、それなのにまた飢えることもない。その風俗は鬼神を信じ、淫祀を好む。父と子は住まいを別にする場合がある。ここは大抵そうである。」

漢書地理志「楚地」

楚有江漢川澤山林之饒　江南地廣或火耕水耨民食魚稻巳漁獵山伐為業　果蓏蠃蛤食物常足　故呰窳偷生而亡積聚　飲食還給不憂凍餓　亦亡千金之家

「楚には長江と漢水、その他の川や水沢、山林の豊かさがある。江南の地は広く、火で耕し、水で草を切る。住民は魚と稲を食べ、漁労や狩猟、山で竹や木を切って暮らしている。果物類や貝類、食物は常に充足している。それゆえ、弱々しく生を盗み、蓄積することをしない。飲食は供給が繰り返され、凍えや餓えを気にしないが、また、大金持ちもいない。」

＊111　赤土の化粧（神代紀一書、隼人の祖先、火酢芹命＝海幸彦の描写）

兄著犢鼻以赭塗掌塗面告其弟曰吾汚身如此永為汝俳優者

「兄はふんどしを付け、赤土を掌に塗り、顔に塗り、その弟に告げて曰く、私は身を汚しこのようです。ずっと、あなたの俳優者（わざひと）になります。」（赭は赤土）

「俳人（わざひと）は、一に曰く「狗人（いぬひと）という」

「火酢芹命の苗裔、諸の隼人等、今に至るまで、天皇の宮墻の傍を離れずして、代々、吠える狗して事え奉る者なり。」

＊112　籩豆（爾雅釈器）

木豆謂之豆　竹豆謂之籩　瓦豆謂之登

「木の豆、これを豆という。竹の豆、これを籩という。瓦の豆、これを登という。」

★博物館に展示してあるのは「登」ということになる。

＊113 **槲の葉**

隋書俀国伝「俗無盤俎藉以槲葉食用手餔之（俗は盤俎なく、槲葉を以って藉（し）き、食は手を用いてこれを餔（く）う。」

★原書には木偏に解という文字が書かれているが、これは松ヤニという意味なので、槲（かしわ）の間違いであろう。

＊114 **棺**

甕棺は「棺有りて槨なし」とセットで記されるような形状ではない。石棺も同様。

木棺を作るには板が必要で、板を作るには利器が必要である。鉄の工具類の普及が想像できる。

＊115 **禊（みそぎ）**

晋書倭人伝　 已葬挙家入水澡浴自絜以除不詳

「葬儀が終わると、家を挙げて水に入り澡浴し、自ら潔くして不詳を除く。」

★晋代の情報ではなく、後の遣隋使、遣唐使から得た解説と思われる。晋書の著者は、唐の房玄齢で、貞観二十年（646）の完成。

★記、紀でも、伊邪那伎命が黄泉の国から帰った後、日向の橘の小門の阿波岐原の海で禊して穢れを祓っている。

＊116 **持衰**

衰（名詞）＝蓑（ミノ）のような粗末な喪服。広く、喪服のこと。（学研漢和大辞典）

今昔物語、巻十六、周防国判官代依観音助存命語第三

「…毎月の十八日には自ら持斎し、僧を請して普門品を読誦せしむ。」

持斎…精進・潔斎して心身を清浄にすること。（仏教）午後食事をしないという戒律を守ること。（学研国語大辞典）

＊117 **青玉**

万葉集 3247 「沼名河の、底なる玉、求めて、得し玉かも、拾ひて、得し玉かも、あたらしき、君が、老ゆらく惜しも」

★「ぬな川」は糸魚川市、姫川の古名

＊118 **倭の植物**

「枏」枏は俗字。楠。

「爾雅」は梅とするが、「本草綱目」では楠とする。南方の木なので南に従う。枏は高大で、葉は桑の如し、南方山中に出る。今、江南では船を造るのに皆この木を用いる。その木の性質は堅くて、善く水に居す。その木は直上（真っ直ぐ伸びる）。葉は豫章に似て、大きさは牛の耳の如し。高さは十余丈。花は赤黄色、

実の色は青で食べられない。

●江南出枏梓。「江南は枏、梓を出す」(史記、貨殖列伝)

●王獨不見夫騰猿乎　其得枏梓豫章也　攬蔓其枝　而王長其間(荘子、山木篇)

「王はあの木に上る猿を見たことがありませんか。その枏や梓、豫章を得るや、その枝をつかんだり、引っ張ったりして、その間では王のように自由にふるまいます。」)

★枏は猿が自由を得ることのできる高木であることがわかる。こういう特徴を実際の木に照らし合わせるとタブノキ(イヌグス)という結論になる。花は小さく、目立たない薄緑色だが、新芽が赤っぽく花のように見える。

「杼」

ヒ＝織機の横糸を通す道具。ドングリ。

食杼栗「杼、栗を食べる」(荘子、山木篇)

★橡なり。栩なり。栩は柔。柞木とか色々書いてある。ドングリの成る木であることは間違いない。和名抄には「トチ」と書いてあるが、実が殻に包まれ特徴的なのに、それに言及する書はない。トチではないようだ。

「柞の実、これを橡という」(小爾雅)、「種結実はその名を栩、その実を橡となす」(本草綱目)

「豫」

「釣樟、烏樟。枕木。釣樟はまた樟の類。樟の小者。高さは丈余(3~4m)。枕は南海山谷に生ず」(本草綱目)

★釣樟は、雌雄異株の落葉灌木で、樹皮は平滑で、黒斑がある。枝葉に香味がある。

★日本の樹種ではクロモジの特徴に一致する。

「樟」

「江東、艟船、多くは樟木を用いる。県名、豫章は木に因りて名を得る。西南所々山谷、これ有り。」(本草綱目)

★常緑大喬木で高さは 30mくらい。木質は硬くて細かい。香気がある。清涼香味があり防虫に用いる。広東、江西等の省に多く見られる。

★樟はクスノキと思われる。

「栵櫪」

「呉越の間、柞を名して歴と為す。歴(櫪)と栵は同じ」(爾雅注)

★櫪は栵(レキ)である。

「栵すなわち柞なり。栩、杼みな一物」(爾雅注)

「栩、柔なり」「柔、栩なり」(説文解字)。

「山に苞櫟あり」(詩経、秦風)、「秦人、柞栵を謂いて栵となす。」

★土地により呼び名がちがったりして、ドングリのなる木の区別があいまいである。

★「匠石が斉に行った。曲轅に至り、栵社に栵の大木があったが、見向きもしなかった。弟子がその理由を尋ねると『あれはつまらない木で、舟を作れば沈むし、棺桶を作ればすぐに腐る。器になるとすぐに壊れる。門戸にすれば樹脂が出て、柱にすれば虫が食う。使い道のない木だ。』と言った。夜になると栵が夢に

現れて、『用がないことで、長寿という我が大用を為したのだ。』と語った。」（荘子、人間世篇）
「無用の用」という荘子の有名な話である。櫟は材木としてはあまり役立たないらしい。
「櫟その実球」（爾雅）「球」は袋状で丸く毛が集まる意。クヌギのドングリが該当しそうである。
「今、柞樹の花葉は倶に栗に似る。四、五月、黄色に開花する。実は丸く、粉によくすり潰し、蒸して食べ、飢えを防ぐことができる。その若葉は茶の代わりに飲むことができる。その木は木目が良くなくて、匠石は不材の木と為し、薪炭を作った。」（爾雅「栩杼」の注）
「橡実。櫟木の子なり。木高二、三丈。三、四月開花、黄色。八、九月結実。槲、櫟みな斗あり。櫟を以って勝となす。木堅くして材に充てるに堪えず。また木の性なり。炭と為す。則ち他木みな及ばず。」（本草綱目集解）
「楘」は「揉、煣（ジウ）」と同じ。木を曲げる意味。「栩（ボウ）」は別字で「木瓜（ボケ）」のこと。日本には平安時代に渡来。
★「楘櫪」は、クヌギと考えて問題ないようである。本草綱目や爾雅をみると、柞、杼、栩、柔、櫟はみな同じ木になってしまうのだが、倭人伝では「杼」を区別している。橡実を長円とする記述もあるので、「杼」はクヌギとよく似ているが、長円形のドングリをつけるコナラと考えれば良いのではないか。

「投橿」

「橿、枋なり。」「枋、車を作るべし」（説文解字）
「英山その上は杻橿多し。注（ニワザクラに似て細葉。一名、**土橿**」（山海経、西山経）
「杻、檍なり。」（爾雅）
★橿やら枋、杻、檍など色々な呼び名があったようだが、車や鋤の柄をを作るのに適した堅い木らしい。一名が土橿とされており、土の漢音がト、呉音がツである。倭人伝の投橿の投の漢音がトウ、呉音がツであるから、土橿と投橿は同じものであろう。樹種の特定は無理で、カシとしておけば良いと思える。
　江戸時代の書に「杻」をモチノキとしているものがあったが、トリモチを作れたり、赤い実が特徴的であるのに、それに言及した書はないから、同意できなかった。

「烏號」

　淮南子、原道訓に「射る者は烏號の弓を張り…」とあり、注に「烏號は拓桑。その材は堅くて勁（強）い。烏が上に止まり、飛ぼうとする時に枝は必ず下にたわむ。強いので、また元に戻る。巣を作っている鳥がいると敢えて飛ばず、その上で號呼する（叫び鳴く）。その枝を伐って弓を作る。因って、烏號の弓という。」と書いてある。
「拓」その葉は蚕を飼うことができ、拓蚕という。葉は硬く、桑に及ばない。処々、山中にこれがある。弓人は材を取る。拓を以って上としている。（本草綱目集解）
「拓」ヅミ、ヤマグワ、ノグワ、イヌグワ。山中に生ず。葉は常桑より大にして、厚く長く、ざらつき多し。（本草綱目啓蒙）
★「烏號」はヤマグワである。

「楓香」

「楓樹は白楊に似て葉は丸くして枝分れする。脂がありて香る。今の楓香がこれ。」(爾雅)

「厚い葉、弱い枝でよく揺れる。一名、欇欇(ショウショウ)」(説文解字)

★落葉の大喬木、掌状で分裂して三になる。秋の落葉前には葉色は黄や紅になり美しいので、常に庭園樹として栽培される。江上に生ずとか九真郡(ベトナム)にあるとかされている南方系の木である。古代の日本には存在しなかった。現在、街路樹としてよく使用されている楓(フウ)はアメリカ楓で、葉の形が異なる。

＊119 **卜骨用獣骨**

「動物の種はニホンジカ、イノシシで、例外にイルカと、ごく限られています。…ニホンジカの使用は八十八例、75.86%で約四分の三を占めます。……次に、どの部分の骨が多用されているかを見ると大部分が肩胛骨です。……卜骨用獣骨として、ニホンジカの肩胛骨を意識的に選んでいたことはあきらかです。……イノシシの肩胛骨は形、大きさともニホンジカとほぼ同じなので、代用品と考えられます。」(「弥生人とまつり」石川日出志編、六興出版)

＊120 **男女の別**

魏志韓伝

【馬韓】無長幼男女之別 「長幼、男女の別はない。」

【辰韓】嫁娶禮俗男女有別 「嫁取りの礼や風俗は男女の別がある。」

【弁辰】言語法俗相似 「言語法俗は(辰韓と)相似る」

呉書「薛綜伝」交阯の人は

　如禽獣長幼無別椎髻徒跣貫頭左衽 「禽獣の如くして、長幼の別なし。椎髻、徒跣、貫頭、左衽」

＊121 **春秋の年紀**

穆王即位春秋已五十矣(史記周本紀)

武王―成王―康王―昭王―**穆王**―共王―懿王―孝王―夷王―厲王―宣王―幽王―平王(周の東遷、春秋時代へ)

＊122 **歳、祀、年**(爾雅釈天)

【夏】歳＝歳星(木星)一次を行くを取る。

★木星は十二年で一巡する(公転周期)。占星して星宿間を十二分の一進むと一歳になる。

【商(殷)】祀＝四時一終を取る。

★四時(春夏秋冬)の祭祀が一巡りすると一祀になる。「商人は鬼を尚び、祀を重しと為す。」とある。

【周】年＝禾一熟を取る。

＊123 **手を打つ**

【雄略記】

爾其一言主大神手打受其捧物 「しかして、その一言主大神は手を打ち、その捧物を受けた。」

★一言主神（葛城氏系）は手を打って雄略天皇に敬意を表している。雄略天皇は拝礼して一言主伸に敬意を表す。民族の違いが現れている。

＊124 **長寿**

「論衡、気寿篇」

儒者説曰太平之時人民侗長百歳左右気和之所生也堯典曰朕在位七十載求禅得舜舜徴三十歳在位堯退老八歳而終至殂落九十八歳未在位之時必已成人今計数百有餘矣又曰舜生三十徴用三十在位五十載陟方乃死適百歳矣文王謂武王曰我百爾九十吾與爾三焉文王九十七而薨武王九十三而崩……故太平之世多長寿人百歳之寿蓋人年之正数也

「儒者は説いて曰く。太平の時、人民は大いに長生きして百歳であった。左右の気が和し、これを生じたのである。堯典は曰う『私は在位七十歳、禅譲を求めて舜を得た。』舜が徴用されて三十年在位し、堯は退位して老い、八年で終至し、九十八歳で崩御した。まだ在位していない時は、必ずすでに成人していて、今なら百有余を計数する。また、曰く。舜は生まれて三十、徴用されて三十、在位五十歳で崩御した。すなわち死は百歳ほどである。文王は武王に言った。『我は百、汝は九十。我と汝は三だろうか。』文王は九十七にして薨じ、武王は九十三にして崩じた。……故に、太平の世は長寿の人が多く百歳の長生きである。おそらく人の生年の正しい数である。」

★儒者は、太古の中国は気が調和し百歳ほどの長寿社会と信じていた。倭はまだそういうものが残っていると考えたのである。日本の古代天皇が長寿とされるのは、このあたりからヒントを得たのではないか。

★「紀」によれば、崇神天皇、百二十歳。垂仁天皇、百四十歳。景行天皇、百六歳。成務天皇、百七歳。仲哀天皇、五十二歳。神功皇后、百歳。応神天皇、百一歳。仁徳天皇、？歳。履中天皇、七十歳。反正天皇、？。允恭天皇？。安康天皇、？。雄略天皇、？

神功皇后を卑弥呼に擬しているから、年齢は魏志倭人伝に記された百歳前後に合わせられているのだろう。

＊125 **社会階級**

大きく分けて大人、下戸、生口という身分、尊卑の差がある階級社会である。その社会秩序を維持するために必要不可欠な法も存在した（成文法ではなく、慣習法であろう）。

＊126 **邸閣**

【魏書徐胡二王伝（王基）】 取雄父邸閣収米三十万斛…南頓有大邸閣計足軍人四十日糧

「雄父邸閣、米三十万斛を収るを取る。…南頓に大邸閣有り、軍人四十日の糧に足るを計う。」

【蜀書後主伝】 冬亮使諸軍運米集於斜谷口治斜谷邸閣

「冬、(諸葛)亮は諸軍をして米を運び斜谷口に集めしめ、斜谷邸閣を治した、」

＊127 物々交換

わらしべ長者には「交換用の絹(かはり絹)」が出てくる。貨幣はないが、何か貨幣代わりの物や相場があったかもしれない。(宇治拾遺物語九十六「長谷寺参籠の男、利生に預かる事」)

＊128 畏憚

王の存在する伊都国も畏憚していたことになる。中央政府の高官と地方自治体の首長の関係を当てはめれば良いようである。中央政府の高官の方が権力が大きかった。

＊129 刺史

【魏志毋丘倹伝】

(正始)六年復征之宮遂奔買溝倹遣玄菟太守王頎追之…

「正始六年、またこれを征した。(高句麗王)宮はついに買溝にはしり、(毋丘)倹は玄菟太守、王頎を遣してこれを追った。)

【魏志扶余伝】

正始中幽州刺史毋丘倹討句麗遣玄菟太守王頎詣扶余

「正始中、幽州刺史、毋丘倹は句麗を討ち、玄菟太守、王頎を遣わして扶余に詣る。」

＊130 率、帥

部族の頭を表わすのに、毋丘倹伝は「渠率」

東沃沮伝、辰韓伝は「渠帥」としているから率と帥は同義である。

三少帝紀には「率種」

原資料の記述者が異なるため表記も様々な形で現れている。漢書匈奴伝には将率という言葉がある。王莽の新では、将の下に五人の率が置かれていた。

＊131 伝送

伝送＝次々に伝えて送る。

「不得差錯(差錯するを得ず)」だから非常に厳しい管理体制が敷かれていたことになる。女王国にはそれを維持できるだけの権力、権威があった。

＊132 逡巡

個人の日記ではないから、「大人と歩いていたら、出会った下戸が、どうしようか、ためらいながら草の中に入った。」などと書いているのではない。倭人全般に「後ずさりして草の中に入り、道を譲る」という特長があ

るぞと報告しているのである。辰韓伝にも同様の記述がある。

【辰韓伝】

男女近倭亦文身…其俗行者相逢皆住譲路

「男女は倭に近く、また文身している。…その風俗では、行く者が出会えば、皆、止まって路を譲る。」

＊133　鬼道に事え能く衆を惑わす

「怪力乱神を語らず」という儒教の徒である帯方郡使にとって、鬼神の祀り・鬼道は軽蔑すべき淫祀である。かなりの嫌悪感を持っていたようで、「よく衆を惑わす」という言葉や　卑、奴、邪、狗という文字の多用にそれが現れている。狗（小犬）は、いやしい者のたとえに使われる。

惑＝今風ならマインドコントロール。

　信仰により正常な判断力を失わせた状態をいう。その中心に卑弥呼がいる。帯方郡使の常識とのずれから生まれた言葉である。

＊134　年すでに長大

「其人寿考或百年或八九十年（倭人は長生きで、或いは百年、或いは八、九十年）」で、これは普通の長生き。長大と表された卑弥呼は百歳をかなり上回る年齢と考えられていた。

＊135　自ずから

自＝みずから、＝おのずから

みずからと訳せば「自分の意思で」という意味になり、おのずからなら「自然に」。後者を採る。日本語ほど明確な区別はないと吉川幸次郎氏は述べている。（「漢文の話」筑摩学芸文庫）

＊136　居所、宮室、楼観

「居所」は卑弥呼が生活する私的空間。「宮室」は公的な場所と考えられる。

千人が侍るという建物の広さはどれほどのものか。一つの建物では無理と思われ、広い敷地の中にいくつも並んでいた可能性がある。

　高床住宅は二階建てのようなものだから、楼観はそれ以上の高さと思われる。

＊137　海を渡った東の倭種国

隋書俀国伝に「夷人は里数を知らない」とあるので、伝聞では千余里を表記できないはず。自ら体験したと思われる。

＊138　侏儒国

「其の南」、「其の東南」の其をどこと解すべきか。

女王国の東の倭種の国とすれば、複数あるわけで基準となる位置が確定できないし、その南は太平洋だ

から、四千余里と表記できる土地も存在しない。「女王を去る」という言葉もあるので、女王国と解する。女王国から東、南、東南という順に書いている。

四千余里は帯方郡使が自ら体験しなければ書けない距離である。それにしては身長三、四尺という数字が腑に落ちない。そんなに小柄な部族が熊野にいたのか？

＊139 **東夷伝**

夫余　在 長城之北

高句麗 在 遼東之東千里

挹婁　在 夫余東北千余里

東沃沮 在 高句麗蓋馬大山之東

韓　　在 帯方之南東西以海為限南與倭接

倭人　在 帯方東南大海之中

濊 南與辰韓北與高句麗沃沮接

＊140 **辰韓の鉄**

【魏志辰韓伝】

国出鉄韓濊倭皆従取之諸市買皆用鉄如中国用銭又以供給二郡

「国は鉄を出す。韓、濊、倭はみな許可を得てこれを取っている。諸市で買うときには、中国が銭を用いるように、皆、鉄を用いる。また（楽浪、帯方）二郡にも供給している。」

【神功皇后摂政紀五十二年九月】

神功皇后に七支刀などを献じた百済使は次のように語る

「我が国の西に川があり、水源は谷那の鉄山から出ています。その遠きことは七日を行っても及びません。まさにこの水を飲み、この山の鉄を取って、永遠に聖朝に奉りましょう。」★百済の西にある川といえば、黄海に注いでいるわけで、その上流、百済東方の山岳地帯から鉄が出たとわかる。辰韓に水源をもつなら南漢江や錦江が該当して小白山脈から出ている。北漢江の水源は濊である。時代が異なるので、別の場所に鉄山が発見された可能性もあるが。

＊141 **辰韓と弁辰の国**

【魏志弁辰伝】

弁辰與辰韓雑居（弁辰は辰韓と雑居する。） 境界が明確であれば雑居という表現にはならないであろう。

【魏志辰韓伝】 辰韓と弁辰の国名が混ぜられている。

已柢（シテイ）国、不斯（フウシ）国、弁辰弥離弥凍（弁辰ビリビトウ）国、弁辰接塗（弁辰セフト）国、勤耆（キンキ）国、難弥離弥凍（ダンビリビトウ）国、弁辰古資弥凍（弁辰コシビトウ）国、弁辰古淳是（弁辰コシュンシ）国、冉奚（ゼンケイ）国、弁辰半路（弁辰ハンロ）国、弁楽奴（ヘンガクド）国、軍弥（クンビ）国、弁軍弥（ヘンクンビ）国、弁辰弥烏邪馬（弁辰ビヲヤバ）国、如湛（ジョタン）国、弁辰甘路（弁辰カンロ）国、戸路（コロ）国、

州鮮(シウセン)国、馬延(バエン)国、弁辰狗邪(弁辰コウヤ)国、弁辰走漕馬(弁辰ソウサウバ)国、弁辰安邪(弁辰アンヤ)国、馬延(バエン)国、弁辰濆盧(弁辰トクロ)国、斯盧(シロ)国、優由(イウイウ)国

＊142 **「有」と「在」**

漢書地理志燕地は「楽浪海中有倭人」

この場合は、楽浪海中が倭人を有する。「楽浪海中に倭人がいる。」 楽浪という既知の土地の海中に、未知であった倭人の存在が明らかになった。無に対応する。

魏志の「倭人在帯方東南大海之中」は、「倭人は帯方東南大海の中にいる(ある)。」

倭人は既に既知の存在となっており、その所在地を説明する形になる。否定語は不在。

＊143 **万二千余里**

【漢書張騫李広利伝第三十一】 大夏　去漢　万二千里　居西南

【漢書西域伝第六十六上】 烏弋山離国王　去長安　万二千二百里……

大月氏国治監氏城　去長安　万一千六百里…

大宛国王治貴山城　去長安　万二千二百五十里

＊144 **「淮南子、時則訓」万二千里**

東方之極　自碣石山過朝鮮貫大人之国東至日出之次搏木之地青土樹木之野大暭句芒之所司者**万二千里**……

南方之極　自北戸孫之外貫顓頊之国南至委火災風之野赤帝祝融之所司者**万二千里**……

中央の極　自崑崙東絶両恒山日月之所道江漢之所出衆民之野五穀之所宜龍門河済相貫以息壌水之州東至於碣石黄帝后土之所司者**万二千里**……

西方之極　自崑崙絶流砂沈羽西至三危之国石城金室飲気之民不死之野少暭蓐収之所司者**万二千里**……

北方之極　自九澤窮夏晦之極北至令正之谷有凍寒積氷雪雹霜霰漂潤群水之野顓頊玄冥之所司者**万二千里**……

＊145 **余里**

【後漢書倭伝】…楽浪郡徼去其国万二千里　去其西北界狗邪韓国七千**余**里

＊146 **親魏大月氏王**

親魏倭王は、西方の大月氏と同格である。

大月氏王波調遣使奉献以調為親魏大月氏王(魏書明帝紀、太和三年、A.D229 年)

「大月氏王波調が使を遣わし奉献す。調を以って親魏大月氏王と為す。」

＊147 **諱(いみな)と字(あざ)**

韓伝では帯方太守は「劉昕」、劉夏と劉昕は同一人物である。

当時は諱(本名、いみな)と字があり、日常は字で呼ばれた。倭人伝の劉夏は字で、昕が諱であろう。制紹の作られた時、劉夏は生きていたわけだから諱は避けられる。

曹操は、「姓は曹、諱は操、字は孟徳」と記されている。生きている間は曹孟徳と呼ばれていたわけである。

＊148 **二匹二丈**

二匹二丈は百尺になり、二十四メートルほど。百ということは、倭人は中国の単位を知っていたことになる。偶然、百尺に一致したとは考えにくい。

＊149 **匈奴の印とその格**

王莽は、漢の印文に「匈奴単于璽」とあったのを「新匈奴単于章」に変更したという。単于の不満は、諸王以下には漢の文字があり章と言ったので、「璽」を除き、「新」を加えた印綬では、臣下と区別がつかないということである。(漢書匈奴伝第六十四下)

この記述から、漢代の匈奴諸王は、「漢匈奴…王章」という印面であったと想像できる。中国雲南省から出土した前漢代の「滇王之印」と比較すると、「漢委奴国王」という後漢の印文は、地方政権という理由で漢が入れられたのかもしれない。時代が異なるので、印制も異なるかもしれないが、大倭王の卑弥呼は「親魏倭王」でかなり格上に感じられる。

＊150 **好は「好む」**

良いものと訳す人がいるが、魏帝の下賜品にいいかげんなものが有ろうはずはない。そんなわかりきったことをわざわざ書かないだろう。「また、特に汝に…を賜う」と記されているから、魏がいとおしんでいることを示す、卑弥呼に配慮した特製品と考えられる。

★「全唐文」の第684巻(清代 1814 年編纂)に「昔魏酬倭国止於銅鏡鉗文…」という文章がある(聖徳大学の山口名誉教授の発見)。「昔、魏は倭国にむくゆるに銅鏡における文を鉗するのを止め、…」と読み下せる。「鉗」は「首かせ」で、「文」は「模様」を表す。要するに、銅鏡の模様の規制(首かせ)をはずしたという意味である。卑弥呼の好物、もっとも望ましい鏡を作るため、ここまで気を配ったのである。布地などにも、卑弥呼が喜びそうな、象やラクダなど、日本では見られない珍しい模様が入っていたのではないか。

＊151 **真珠**

対馬国貢銀記では、対馬の産物として、「白銀、鉛、錫、真珠、金、漆の類」を挙げており、山中の鉱物や漆の中に真珠が混ぜられているから、これも辰砂であろう。

「魚蚌の珠と禹貢の琅玕(青緑色の宝玉)はみな真珠なり」(説文解字「琅」、段玉裁注)

真珠はパールにも石にも使われている。

＊152 **帯方太守の交代**

景初二年　太守、劉昕（＝劉夏と思われる。）、明帝により潜軍として楽浪・帯方を急襲。

　　帯方太守となる。

六月、難升米、帯方郡に至る。（太守、劉夏）

十二月、魏帝の制詔が下される

景初三年　（おそらく太守交代、弓遵）正月の明帝急死後に人事異動があったと思われる。

正始元年　太守、弓遵。帯方郡使、梯儁を倭へ派遣。

正始七年、太守、弓遵、韓との戦いで戦死。韓滅びる。

正始八年、太守、王頎。玄菟太守から転任。帯方郡使、張政を倭へ派遣。

＊153 **仮**

天子**仮**太祖節鉞録尚書事　「天子（献帝）は、太祖（曹操）に節鉞と録尚書事を仮した。」

曹操は軍事権、刑罰権と上奏権を与えられたのである。（魏志武帝紀）

＊154 **東大寺山古墳出土の鉄刀銘文**

奈良県天理市和爾にある東大寺山古墳から、「中平■年（184~189）」という銘のある鉄剣が出土している。付近には和爾坐赤坂比古神社、和爾下神社があり、和爾氏の居住が想定されているが、古墳は四世紀後半のものというから、和邇氏間で伝世されていたものが埋められたようである。中平は後漢末期、霊帝（中平 1~5）、献帝（中平 6＝189）時代の年号で、中平元年に黄巾の乱が起こり、中平六年に、公孫度が遼東太守になっている。後漢はその後も戦乱が続き、遼東地方までかまう余裕がなく半独立状態であった。

　この鉄剣の入手が中平六年以降で、それに近い時代という条件付きの話になるが、この頃、日本から使者が派遣されたとしても、後漢の都まで達することは考えにくく、遼東太守、公孫氏の元へ派遣されたか、そこでストップさせられたかだと思われる。少し後になるが、「建安中（196~220）、公孫康が楽浪郡南方を分割して帯方郡を創設し、韓や倭は帯方に属した」と魏志韓伝にある。この鉄剣は卑彌呼時代の倭と公孫氏の交流を示す証拠品であるかもしれない。和邇氏の祖先がその遣使に関係していたということになるのではないか。

＊155 **潜軍**

魏志韓伝

景初中明帝密遣帯方太守劉昕楽浪太守鮮于嗣越海定二郡

「景初中、明帝は、密かに帯方太守、劉昕、楽浪太守、鮮于嗣を派遣し、海を越えて二郡を定めた。」

おそらく、太守という地位を与えて派遣されたのであろう。

＊156 **海東諸郡の平定**

魏志明帝紀（景初二年）秋八月…丙寅（八日）司馬宣王圍公孫淵於襄平大破之傳淵首于京都海東諸郡平

「秋八月、丙寅。司馬宣王は公孫淵を襄平に囲い、大いにこれを破る。淵の首を京都に伝え、海東諸郡は平らぐ。」（海東諸郡とは、楽浪、帯方、遼東の三郡）

＊157 **倭の朝貢**

●周の時、天下太平、倭人は罽草を献じる。（論衡）

●前漢の平和な時代、楽浪海中の倭人が燕地を訪れていた。（漢書地理志燕地）

●後漢の光武帝時代、王莽とその後の混乱を鎮め平和が訪れたため、倭奴国が朝貢した。（後漢代のデータ）

★今回、海東諸郡を平定した。倭が朝貢してきたのは平和の訪れる前兆だ。中国統一に一歩近づいたという心境であろう。

＊158 **太守交代の所要時間**

●七年春二月幽州刺史毋丘倹討高句麗　夏五月討濊貊皆破之韓那奚等数十国各率種落降（魏志三少帝紀）

「（正始）七年、春二月、幽州刺史、毋丘倹は高句麗を討つ。夏五月、濊貊を討ち、みな之を破る。韓、那奚等、数十国の各率種は落ち降る。」

●八年太守王頎到官 「（正始）八年、太守、王頎、官に到る。」（魏志倭人伝）

★七年五月に韓が降伏しているから、前太守弓遵が韓との戦いで戦死したのは五月以前ということになる。後任の王頎は早くても八年正月の着任だから最短でも七ヶ月かかっている。

＊159 **明帝の評**

魏書明帝紀

評曰沈毅断識任心而行蓋有君人之至概焉。

「評して曰く、沈着剛毅で決断力、識見があり、心意気で行動する。おそらく、君主として最高の器量があった。

＊160 **黄幢**

幢は筒型の旗。儀仗や指揮に用いる。

魏は土徳と称していて土の色、黄色には重要な意味がある。邪馬壱国に対する魏の全面的な支援を、狗奴国に示す意図があったと思われる。

＊161 **蜀との戦い**

(正始)五年春二月詔大将軍曹爽率衆征蜀…

　　五月丙午大将軍曹爽引軍還(魏書三少帝紀)

「五年、春二月。詔し、大将軍、曹爽は衆を率い、蜀に征す。

　　(五月)丙午。大将軍、曹爽は軍を引き、還る。」

＊162 **魏と高句麗の戦い**

【魏書高句麗伝】

正始三年宮寇西安平　其五年為幽州刺史毋丘倹所破語倹伝

「正始三年、(位)宮は西安平を寇す。その五年、幽州刺史、毋丘倹の破る所となる語は倹伝に在り。」

【魏書毋丘倹伝】

正始中倹以高句麗数侵叛督諸軍歩騎萬人出玄菟従諸道討之……六年復征之宮遂奔買溝遣玄菟太守王頎追之

「正始中(おそらく五年)、(毋丘)倹は高句麗がたびたび侵し叛くを以って、諸軍の歩と騎、万人を督し、玄菟を出て諸道よりこれを討つ。……六年、またこれを征し、宮はついに買溝に奔る。玄菟太守、王頎を遣し、これを追う。」

＊163 **魏と韓の戦い**

【魏志韓伝】

部従事呉林以楽浪本統韓国分割辰韓八国以與楽浪…臣幘沾韓忿攻帯方郡崎離営時太守弓遵楽浪太守劉茂興兵伐之遵戦死二郡遂滅韓

「部従事の呉林は楽浪郡が昔韓国を統御していたことを理由に辰韓八国を分割し、楽浪に組み入れた。…韓の有力者は韓に怒りを広め、帯方郡の崎離営を攻めた。その時、太守弓遵と楽浪太守、劉茂は兵を興してこれを伐った。(弓)遵は戦死。二郡は遂に韓を滅ぼした。」

＊164 **塞曹掾史**

塞は「ふさぐ」「とりで」「国境」というような意味。曹は三国志に功曹、賊曹、東曹掾というような官名が見られ、管轄を表す文字。したがって、塞曹とは辺境管理の役職と思われる。掾史は長官に採用された属僚。地位はあまり高くない。

張政は、軍隊ではなく少人数で渡来しているから、軍事作戦の立案などにかかわる指導力のある人物と思われる。

＊165 **難升米に授ける**

四年に派遣された使者は、伊聲耆、掖邪狗等だが、黄幢は難升米に授けられており、難升米が責任者という位置づけらしい。帰国後、地位が上がったと思われる。

＊166 **韓の滅亡**

【魏志韓伝】

侯准既僭号称王為燕亡人衛満所攻撃将其左右宮人走入海居韓地自号韓王其後絶滅今韓人猶有奉其祭祀者…

「(朝鮮)侯の(箕)准は既に僭号して王を称していたが、燕の亡命人、衛満の攻撃するところとなった。(准は)左右の宮人をひきいて海に逃れ、韓地に居住し、自ら韓王と号した。其の後裔は絶滅した。今、韓人でなおその祭祀を奉るものがいる。」…

臣幘沾韓韓忿攻帯方郡埼離営時太守弓遵楽浪太守劉茂興兵伐之遵戦死二郡遂滅韓

「韓の有力者は韓に忿りを広め、帯方郡の埼離営を攻めた。時に、太守の弓遵と楽浪太守の劉茂は兵を興し、これを伐った。(弓)遵は戦死。二郡はついに韓を滅ぼした。」

★韓王家の箕氏が絶滅させられたのはこの時である。しかし、その後も祭祀を続ける韓人が存在した。馬韓、辰韓には王が記されていない。この時、地位を追われたのであろう。弁辰に王の存在が記されているのは、この戦いと無縁で、地位を保全されていたということか。

＊167 **以**

【「漢文の話」吉川幸次郎著、ちくま学芸文庫】

「一則以喜　一則以懼」は「一則喜　一則懼」一つには則ち喜び、一つには則ち懼る。もしくは、「一以喜　一以懼」一つには以って喜び、一つには以って懼る。といえぬことはなく、そういっても意味は表現される。それを、現実には、「一則以喜　一則以懼」という。やはり主としてリズムの関係からである。……

　それとともに知らねばならぬことは、かく助字は、しばしばリズムの充足のために添えられるものであるから、はっきりした意味を追求しにくいことが、しばしばである。……またリズムの充足という以外、意味の上からのはっきりした説明は、むつかしそうに思われる。

＊168 **尺の長さの変化**

一尺の物差しが発見されており、戦国、秦、漢は 23.1 ㎝、魏は 24.2cm。唐は 31.6cm とされている。同じ魏代のうちでも変化があり、甘粛省から 23.8 ㎝の魏の尺骨が出土している。一歩は六尺のままなので歩は人間の歩幅のサイズと合わなくなってきた。名目は同じでも実質は多い。増税を図って尺が増加されたようである。穀物を計る量も同じように増加している。24.2＊6なので、魏の一歩は 145.2cm＝1.452m。百余歩は 150m くらいになる。

＊169 **年すでに長大**

57+60 で最低限でも 117 歳。孝霊天皇が何歳の時に生まれたかにもよるが、その治世は 76 年だから、ヤマトトビモモソ姫は百数十歳になる。これは長大と言うしかない。いや、魏志に長大とあるから、こういう年齢にされたのか？

＊170 **イリヒコ、イリヒメ**

崇神朝になって、突如、入彦、入姫という名が大量に現れる。

【崇神記】

御真木入日子印恵命坐師木水垣宮

「ミマキイリヒコイニエの命はシキ水垣宮に坐す。」★纏向も磯城に含まれる。

崇神天皇の御子

豊木入日子命(トヨ　キ　イリヒコ命)トヨは美称、紀に入った男の意味。母が紀氏。

豊鉏入比売命(トヨスキイリヒメ命)

大入杵命(オオイリキ命)、八坂之入日子命(ヤサカノイリヒコ命)、沼名木之入比売命(ヌナキノイリヒメ命)、十市之入比売命(トオチノイリヒメ命)、**伊玖米入日子伊沙知命(イクメイリビコイサチ命＝垂仁天皇)**

【垂仁紀】

五年冬十月己卯朔、天皇幸来目居於高宮

「五年冬十月己卯朔、天皇はクメにいでまして、高宮に居(ま)します。」

＊171 **大坂と山背からの反乱**

山背(京都)と大阪を支配できていない。ということは、崇神天皇は南の和歌山方面から大和入りしたことになる。

＊172 **箸墓の話の挿入**

●十年九月壬子(九月二十七日)に武埴安彦とその妻の、山背と大阪からの反乱が発覚して戦闘。鎮圧。

●「是の後」とヤマトトトビモモソ姫、箸墓の話の挿入。

●十年十月朔(十月一日)に四道将軍の出発命令。

★四道将軍の派遣は武埴安彦等の反乱からわずか四日後である。その間に箸墓の由来話を挟んでいる。墓造りは何日でできたのか？　無関係な箸墓の話を無理やり挿入したとわかる。

＊173 **市磯長尾市**

奈良県葛城市(旧當麻町)に長尾神社があり、付近に市場、南今市、磯野の地名がみられる。おそらく、このあたりの首長であろう。

＊174 **崇神朝初期の全国的な混乱**

正統継承者であるはずの崇神天皇初期の大和は大混乱である。大坂、山背と戦ったり、地主神を祀ろうとしたのに祀れなかったり。四道将軍を派遣したり。畿内も地方も従っていないし、神々ともぎくしゃくしている。これは崇神朝が入彦、つまり、侵入征服者であった証左である。

＊175 **帝紀、旧辞**

●敏達紀に「天皇は仏法を信ぜずして、文史を愛す」という記述があり、この天皇あたりから国史が意識されたのではないか？

●推古紀二十八年（620）に、「天皇記及び国記、臣連伴造国造百八十部併せて公民等の本記を録す。」とある。（推古天皇は敏達皇后）

古事記は712年、日本書紀は720年の成立とされているが、日本書紀は疑わしい。ずっと改訂作業が続けられていた形跡がある。

＊176 **大神氏の伝承がなぜ崇神紀に**

古事記だけなら、名のみで、何の印象も残らない孝霊天皇の皇女、ヤマトトビモモソ姫を箸墓、大物主神と結び付けて詳しく語る。日本書紀が伝えようとしたのは何か。大いに疑問を感じなければならないことである。

饒速日命を祖先とする物部氏の前王朝の歴史と、大和朝廷の歴史を齟齬なくつなぎ合わせるために様々な工夫がなされている。

＊177 **大田田根子**

大田田根子は茅渟県の陶邑（古事記では河内の美努村）で発見された。母の活玉依毘売は「陶津耳の娘」「奇日方天日方武茅渟祇の娘」（崇神紀）

陶村は大阪府堺市付近（泉北丘陵）が想定されている。

＊178 **ヨバヒ**

「呼ぶという語から出て、その動作の継続を示す名詞である。古代には婚・娉・結婚などという漢語を以てこの語の対訳としていたほどであり、男が求婚し、またそれ以後も女のもとにかようことを意味し、それは正常なる求婚手段もしくは婚姻生活であった。」（民族学辞典、柳田国男監修、東京堂出版）

＊179 **文帝（司馬昭）**

【晋書倭人伝】 及文帝作相又数至泰始初遣使重訳入貢

（司馬昭は晋の建国後、文帝と贈り名された。）

＊180 **晋への遣使**

【晋書武帝紀】泰始元年冬十二月景（丙）寅設壇于南郊百僚在位及匈奴南単于四夷会者数万人

＊181 **司馬昭、相国となる**

【魏書三少帝紀（陳留王）】景元四年

冬十月甲寅復命大将軍進位爵賜一如前詔又固辞乃止

「冬、十月甲寅、また大将軍に位爵を進め賜いものを命じる。ひとしく、前の詔の如し。また固辞し、すなわち止む。」

★大将軍、司馬昭の昇進、加増（相国、晋公、九錫の礼、十郡の所領）が命ぜられたが、以前からずっと固辞していた。

十一月大赦自鄧艾鐘會率衆伐蜀所至輒克是月蜀主劉禅詣艾降巴蜀皆平

「十一月、大赦す。鄧艾、鐘會が衆を率いて蜀を討ち、至る所でたちまち勝ち、この月、蜀主、劉禅が（鄧）艾に詣りて降る。巴蜀みな平らぐによる。」

★蜀が滅び、固辞する理由を失ったようで、司馬昭は相国になったと思われる。

咸熙元年二月進晋公爵為王封十郡並前二十

「咸熙元年、二月、晋公の爵を進め（晋）王となす。十郡を封じ、前に併せ二十とす。」

★公から王になり、所領も倍増

夏五月庚申相国晋王奏復五等爵

「夏、五月庚申。相国晋王は五等の爵を復すを奏す。」

★相国の初出

【魏書王衛二劉伝、裴松之注】

文王以景元四年鐘鄧平蜀後始授相国位

「文王は景元四年、鐘（會）、鄧（艾）が蜀を平らぐ後、初めて相国位を授かる。」

【晋書武帝紀（司馬炎）】

…咸熙二年五月立為晋王太子八月辛卯文帝崩太子嗣相国晋王位

「…咸熙二年、五月。晋王太子となる。八月辛卯、文帝崩じ、太子が相国、晋王位を嗣ぐ。」

＊182 **数**

数＝若干の。二、三の。五、六の。

数人…二、三人より五、六人までを言う。（大字典）

＊183 **壱与と陳寿は同世代**

●卑弥呼の死が正始八年（247）頃

●男王が即位、その後戦乱。

●壱与、十三歳の即位

壱与の即位年はわからないが、250年とすれば、237年の生まれになる。

＊184 **浮由天下 ■四海**

【荘子逍遥遊篇】

藐姑射之山有神人居焉肌膚若冰雪淖約如處子不食五穀吸風飲露乘雲気御飛竜而遊乎四海之外

「藐姑射之山に神人が住んでいる。肌は氷や雪のように白く、しなやかさは乙女のようである。五穀を食べ

ず、風を吸い、露を飲む。**雲気に乗り、飛竜を御して四海の外にあそぶ** 」

【荘子斉物論篇】

王倪曰至人神矣大沢焚而不能熱河漢沍而不能寒疾雷破山風振海而不能驚若然者乗雲気騎日月而遊乎四海之外死生無変於己而況利害之端乎

「王倪曰く。至人は神である。大沢が焼けても熱がらせることはできないし、黄河や漢水が凍っても寒がらせることはできない。激しい雷が山を破り、風が海を振るわせても驚かせることはできない。こういう者は**雲気に乗り、日月に騎って四海の外に遊ぶ**。死生も己を変えることない、況や利害の端くれなどは。」

＊185 **朝鮮半島の銅鏡**

「朝鮮半島の銅鏡文化は、中・日両国とくらべると、あまり盛んとはいえない。…北部では大同江流域、すなわち楽浪郡の境域に集中している。銅鏡の使用者は、楽浪郡にいた漢人だけかもしれない。南部では主に東半分の慶尚南道と慶尚北道に集中している。西半分の忠清道、全羅南道ではまだ出土していない。…朝鮮半島北部から出土した漢式鏡は、漢人によって直接伝来されたようであり、朝鮮半島南部の漢鏡は、すなわち日本を通じて逆に伝来したのではないかと思っている。(「弥生文化と古代中国」王金林著、学生社)」

★日本の銅鏡文化は新羅(慶尚南道、慶尚北道)と結びついている。

＊186 **彫啄**

文字がはっきりしない。写真の目視では口偏のように見えるので、琢の借字で啄と書いたのではないかと考えた。「彫琢刻鏤」という言葉が淮南子や荀子などに見られる。

＊187 **尚方**

魏では、洛陽に左、中、右の三つの尚方があり、宮廷調度品などの生産にたずさわっていた。鏡はもちろん、親魏倭王の金印や織物なども尚方で作られたと思われる。

＊188 **青盖鏡**

中国でも青盖鏡が出土していて「青盖作鏡四夷服、多賀中国人民富、雲雨時節五穀熟」の銘文が見られる。後漢鏡に分類されている。青盖(蓋)は、紀元前後、前漢末から新、後漢初期にかけての、中国動乱期に活動していた鏡師のようである。新の王莽時代、周辺諸民族(四夷)がすべて反乱して中国は苦しんでいた。国分茶臼山古墳出土の青盖鏡銘文にある「胡虜」と「殄滅」は、漢書王莽伝にも見られる文字で、当時の常用句だったと思われる。

＊189 **文章**

文章は模様を意味する場合もあるが、ここでいう文章は言葉を連ねたものであろう。彫文、刻鏤とは別に作

られており、銘文を意味すると思われる。「みな文章を作る」だから、すべての鏡に銘文が入れられていたことになり、銘文が入っていない三角縁神獣鏡は倭鏡と簡単に区別がつけられる。

＊190 **洛陽**

火徳の漢は、火を消すサンズイ偏の「洛」の字を嫌い雒陽と書いた。したがって洛陽と書いてある三角縁神獣鏡はその時代（＝漢）の鏡ではありえない。（富岡謙蔵説）

＊191 **越守、巨**

●越は小篆の越に近い文字のように見える。越の守り神という意味になり、倭人と越の関係をうかがわせる。

●神獣はＬ字型の差し金（巨）を銜えている。差し金は曲直を明らかにするもの。つまり、神獣の正邪を判定する能力をを表す。中国出土の神獣鏡にも巨を銜えたものがあり、形式として確立している。

＊192 **中国、尚方鏡の銘文**

【王金林著「弥生文化と古代中国」（学生社）】

中国出土の尚方鏡銘文に見られる常用句。

「尚方作鏡真大好・上有仙人不知老・渇飲玉泉饑食棗・徘徊神山採其艸・寿敞金石西王母」

「浮遊天下敖四海」

「寿如金石」、「位至三公」、「君宜高官」

★三角縁神獣鏡銘文は明らかに尚方鏡の影響下にある。

＊193 **呉鏡の銘文**

「黄武七年七月丙午朔七日甲子・紀主治時・大鏡陳世厳作明鏡・服者立至公」

「黄竜元年太歳在己酉七月壬子■十■甲子・師陳世造作百湅明鏡・其有服者命久富貴・宜■■」

★型を作ってから青銅を流し込むわけで、そこには時間差がある。製造年月日を書いてあるが、年はともかく、月日に関しては形式的なもとのしか思えないのだが、何か強いこだわりがあって、呉鏡には必ず入れてある。この記述が真実なら、青銅を流し込む日が決定されてから、銘文を彫ったことになる。生産スケジュールがきちんと定められていたと解すしかない。毎日、湯水の如く青銅を生産していたわけではなく、同じ日に様々なものをまとめて作ったとは思えるけれど、そんなに都合よく進むのかという疑問は消せない。

★呉鏡の作者は陳世であるが、銘文のあり方を見ると、漢の尚方鏡の伝統を受け継いでいる三角縁神獣鏡の陳氏とは明らかに別人である。陳氏は南方系の図形を描きながら、北方系の銘文を作っているわけで、楊州の鏡師が洛陽へ強制移住させられ、尚方局で鏡作りをしていたという想定に一致するのである。この人選は卑弥呼に下賜する鏡のための配慮と思われる。

＊194 **崑崙**

中国西方にある高山地帯、崑崙は天に最も近い理想郷で、聖人、西王母が住んでいるとされた。西王母

の伝説の起源は古く、東王父は西王母と対になるものとして、後に加えられたと思われる。崑崙へ遊びに来る。仙人、赤松子は神農の頃の雨師であった。しばしば崑崙山に行き、いつも西王母の石室に宿ったとされている。崑崙には青龍、白虎、蝮蛇がおり、獅子、辟邪、天鹿、焦羊という神獣がいる(抱朴子、祛惑)。三角縁神獣鏡の銘文には青龍、白虎、獅子、辟邪が現れる。木には珠樹、玉樹、琁樹、不死樹、沙棠、絳樹、碧樹、瑤樹が挙げられている(淮南子、墜形訓)。

＊195　三角縁画像鏡

三角縁画像鏡、浙江省紹興出土＝古代の越の地

＊196　逸書「後漢書」

隋書、志第二十八、経籍二には、范曄以前の後漢書として、以下の書が記載されている。

●東観漢記百四十三巻(長水校尉劉珍等撰)

●後漢書百三十巻(呉武陵太守謝承撰)　　↑　陳寿、閲覧可能

……

●後漢記六十五巻(晋散騎常侍薛瑩撰)

●續漢書八十三巻(晋秘書監司馬彪撰)

●後漢書十七巻(晋少府卿華嶠撰)

●後漢書八十五巻(晋祠部郎謝沈撰)

●後漢南記四十五巻(晋江州従事張瑩撰)

●後漢書九十五巻(晋秘書監袁山松撰)

范曄の時代にはもっと多かったのではないか。范曄の後漢書が勝ち残ったのは、やはり、正確さという評価で上回ったのであろう。評価の低い書は大事にされず、戦乱などのたびに放棄され、年月の経過とともに姿を消してゆく。

デジタル時代になった今後は事情が変わるだろう。すべての文献を残すことが可能になっているかもしれない。

＊197　光和

桓帝、霊帝の交代は 168 年。光和年間(178~183)とするなら、桓霊の間(桓帝と霊帝にまたがる)という後漢書の記述から外れる。「霊帝の時」と書けばよいだけなのである。

光和と記す梁書は唐代の作。

＊198　桓霊の末

桓霊の末とは、桓帝(147~167)の末と霊帝(168~188)の末をあわせた表現。霊帝中期は、ややましな状態だったわけである。

桓帝末から官僚と宦官が激しい抗争を続けた(党錮之禍、166、169)。霊帝、中平元年(184)には黄巾の

乱が勃発。乱の平定後も各地で反乱が続いた。霊帝は中平六年に崩じ、少帝、献帝と続き、漢は滅亡に向かう。

＊199 **夏后少康の子**

魏略逸文(翰苑所載)

聞其旧語自謂太伯之後昔「夏后少康之子封於会稽断髪文身以避蛟龍之害」

魏志倭人伝

「夏后少康之子封於会稽断髪文身以避蛟龍之害」

漢書地理志粤地

其君禹後「帝少康之庶子云封於会稽文身断髪以避蛟龍之害」

史記越世家

其先禹之苗裔而「夏后帝少康之庶子也」

少康の子に関し、魏志と魏略が同じ文になっているので、元資料の帯方郡使の報告書にこの文があったと思われる。漢書地理志粤地からの引用なので、帯方郡使も漢書をよく知っていた。

＊200 **景初四年銘鏡**

景初四年五月丙午之日陳是作鏡吏人銘之位至三公母人銘之保子宜孫寿如金石兮

(銘は言偏、フォントが無く代用)。言名

形式的な語句に過ぎないが、景初四年五月(実際は正始元年)なら、もう倭国に向けて船出している時期であり、鏡が中国で作られた可能性は排除されることになる。五月丙午之日を入れるのは呉鏡の銘文に見られる特徴である。

径 17cm くらいの盤龍鏡で四匹の龍が描かれ、三角縁神獣鏡に描かれた神獣との類似点はなく、別の工人の作であることが明らかである。

＊201 **景初四年作**

鏡が日本にもたらされたのは正始元年の夏頃、しかも九州である。それが大和に届くのは秋だから、豪族に下賜したとすれば、正始二年(景初 5 年)あたりから。実際に、景初四年五月(正始元年)に鋳造されることはあり得ない。

＊202 **景初三年銘鏡**

神原古墳出土景初三年鏡銘文、径は 23cm

景初三年陳是作鏡自有経述本是京師杜地■出吏人■■位至三公母人 ■之保子宜孫壽如金石兮

＊203 **規格化**

魏鏡と考えられる三角縁神獣鏡は、21 ㎝から 26 ㎝くらいまでの幅があり、中国では珍しい大型の鏡である。「抱朴子、登渉」に、径九寸以上の鏡には化け物の正体を写しだし、追い払う力があると記されている。魏の一寸が 2.4cm くらいだから、九寸が 21.6cm、一尺が 24 ㎝ほど。経年劣化の伸縮を考えると、一尺（十寸）で作られ可能性はありはしないか。魔除けに適したサイズで、それが考慮されていることは間違いない。

邪を追い払うための鏡であれば、発掘された木棺の外側、周囲に三角縁神獣鏡が鏡面を表にして並べて立てかけられているのも理解できるのである。近寄って来た魔物は自分の姿が映し出されるのを見る形になる。

＊204 **王氏鏡、張氏鏡、倭人の姓**

どちらも三角縁神獣という中国にあるかどうかという特殊な形状を採用。笠松型と呼ばれる中国鏡にはない独自のパターンの採用など、陳氏鏡の模倣品である。

王氏鏡

銘文が反時計回転で、尚方鏡の伝統から外れている。

続日本紀、称徳天皇の神護景雲元年（767）十一月に、「私鋳銭人、王清麻呂（おうのきよまろ）等四十人に姓を鋳銭部と賜い出羽国に流す。」という記述がある。

偽金造りという製銅品に関係する王氏が存在した。

張氏鏡

陳氏鏡では、丸い土台の上に真っ直ぐ笠松型が伸びているが、張氏鏡ではそれがずれている。何か意図があって、そうなっているのに理解していない。作りが荒いということである。

熊本県菊水町、江田船山古墳出土太刀銘に、「書者張安」という記述があり、雄略天皇時代に張という姓が存在した。書者というのは太刀銘の金象嵌を作った人物と思われる。

「台天下獲■■■鹵大王世、奉事典曹人名无■弖、八月中、用大錡釜并四尺廷刀、八十練■十■三寸上好■、服此刀者長寿、子孫、注々得三恩也。不失其能統。作刀者名伊太■、書者張安也」

＊205 **干**

●干越生葛絺（淮南子、原道訓）…「干呉也。絺細葛也（後漢、高誘注）」

●夫有干越之剣者　柙而蔵之　不敢用也　宝之至也（荘子、刻意）

「呉越の剣を有する者は、木の箱に入れてこれをしまい込み、敢えて用いない。宝あつかいの至りである。」

★もともと邗という国があったが、呉が滅ぼして所領と為した。そこで、呉も干や邗と表されるようになったという。

＊206 **邗溝**

春秋左氏伝、哀公九年

秋呉城邗溝通江淮（秋、呉は邗に城づき、溝して江淮を通ず。）

水経注巻三十

昔呉将伐斉北覇中国　自広陵城東南築邗城　城下掘深溝　謂之韓江亦曰邗冥渠

（昔、呉は将に斉を討ちて北し、中国に覇すさんとす。広陵城より東南に邗城を築き、城下に深溝を掘る。これを韓江といい、亦は邗冥渠という。）

＊207 **遼東、遼西の倭人**

●魏志鮮卑伝、裴松之注

魏書曰…鮮卑衆日多田畜射猟不足給食後檀石槐乃按行烏侯秦水廣袤数百里渟不流中有魚而不能得**聞汗人善捕魚於是檀石槐東撃汗国得千余家徙置烏侯秦水上使捕魚以助糧**至于今烏侯秦水上有汗人数百戸

「魏書曰く…鮮卑の人員は日ごとに多くなり、農耕、牧畜、狩猟では食をまかなうに足りなかった。後、檀石槐は烏侯秦水を調べに行ったが、水は、東西南北、数百里にわたり止まって流れず、中に魚がいるのに得ることができなかった。汗人が魚を上手く捕らえると聞き、ここにおいて、檀石槐は東に汗国を撃ち、千余家を得て、移して、烏侯秦水上に置き、魚を捕らせて食料を補助した。今に至るまで、烏侯秦水上に汗人数百戸がある。」

●後漢書烏桓鮮卑列伝第八十

檀石槐乃自徇行見烏集秦水廣従数百里水停不流其中有魚不能得**聞倭人善網捕於是東撃倭人国**

「檀石槐は自ら巡り行き、烏侯秦水を見た。東西南北、数百里に水が止どまって流れず、その中に魚がいるのに得ることができない。倭人が網で捕るのが上手いと聞き、東へ行き倭人国を撃った。」

●水経注（北魏、酈道元著）…　遼西郡、白狼水の水経

高平川水注之水出西北平川東流**逕倭城北盖倭地人徙之**

「高平川水がこれに注ぐ。水は西北平川を出て、東に流れ、倭城北をめぐる。おそらく倭地で人がここに移動した。」

★おそらく遼東郡と遼西郡の境界付近に倭城があったと思われる。略取された倭人が城を築けるとは考えられないから、これは檀石槐に撃たれた倭人国の遺跡で、烏侯秦水はそれより西にあることになる。

＊208 **倭山**

高句麗本紀第三（大祖大王）

　八十年秋七月遂成猟於**倭山**奥　　九十四年秋七月遂成猟於**倭山**之下…

★132 年と 146 年のこととされている。八十とか九十四という大祖大王の在位年を考えると、どの程度信じていいのかという問題はある。倭国大乱が 168 年前後である。

＊209 **蓋国**

山海経海内北経

蓋国在鉅燕南倭北倭属燕(懿行案魏志東夷伝云東沃沮在高句麗蓋馬大山之東。後漢書東夷伝同李賢注云蓋馬県名属玄菟郡今案蓋馬疑本蓋国地)

「蓋国は巨焉の南、倭の北に在る。倭は燕に属す。(懿行案ずるに、魏志東夷伝は、東沃沮は高句麗の蓋馬大山の東に在るという。後漢書東夷伝、同じく李賢注は蓋馬県名は玄菟郡に属すという。今、案ずるに、蓋馬は、元、蓋国の地と疑う。)」

★懿行＝郝懿行＝山海経注者

＊210 **呉人の逃げ道**

越王勾踐は山東半島南西部の琅邪に都を移し、史記は「越兵は江淮の東に横行し、諸侯は勾踐を賀して覇王と号した」と描写している。

西には楚があるし、北も同じく対立していた斉なので、不安や嫌悪を感じて、越に対する従属を嫌い逃れた呉人は、山東半島から海を渡るしかなかったであろう。かなり大規模な政治難民である。

＊211 **朝鮮王、箕氏の韓建国**

●殷の王族、箕氏が周初期に朝鮮半島に移住して(箕氏)朝鮮を建国した。

●衛満は漢の高祖時代、燕王盧綰の下にいたようで、盧綰が謀反の嫌疑をかけられ匈奴に逃亡した際、衛満は南に逃れ朝鮮に亡命した。やがて、国を簒奪して衛氏朝鮮を建てたが、攻撃された朝鮮王順は宮人とともに南に逃れ韓を建国した。これが馬韓となる。

後、衛氏朝鮮は漢の武帝に滅ぼされ楽浪郡となった。楽浪から辰韓人が馬韓に逃れてきたところ、馬韓が西の土地を割いて居住させたという(魏志辰韓伝)。辰韓は弁辰と雑居しており、弁辰人も同じような境遇と考えられる。

＊212 **論衡**

論衡、儒増篇 「周時天下太平　越裳献白雉　倭人貢鬯草」

論衡、恢国篇 「成王之時　越常献雉　倭人貢暢」

＊213 **鬯草**

将祭灌暢降神(論衡、異虚篇) 「祭りに用い、におい酒を地に注いで神を降ろす」

★太伯、仲雍は薬草を採りに行くことを口実に荊蛮に逃れたとされているから、鬯草を献じるのはつじつまが合う。

＊214 **越裳国**

尚書大伝曰交阯之南有越裳国周公居摂六年制礼作楽天下和平越裳以三象重訳而献白雉(太平御覧)

「尚書大伝曰く、交阯の南に越裳国有り。周公が摂政となって六年、礼を定め楽を作り天下和平。越裳が三象を以って訳を重ね白雉を献じた。」

＊215 **呉越春秋勾踐陰謀外伝第九**

…越王曰善乃行第一術　立東郊以祭陽名曰東皇公立西郊以祭陰名曰西王母祭陵山於会稽祀水沢於江州　事鬼神一年国不被災越王曰善哉大夫之術願論其余

★呉越春秋は漢代の編纂である。呉越は文字を持たなかったから、口承による伝承を整理したと思われる。表現には漢代の言葉が使われ、陵山は越の始祖、会稽で崩じたという禹の陵墓だが、帝王墓に陵という言葉を使い出したのは漢代から。江州も呉と楚の境界付近で越が祀ることはできないという注がある。祖先と水神を祀ったと考えておけば十分であろう。

＊216 **公孫卿**

公孫卿は斉人。

神人は東莱山で見られると言ったので、武帝は見たくて山に登り数日留まったが見られなかった。公孫卿は誅されるのを恐れて上記のように言い訳したとされている。（三輔黄図、漢武故事からの引用）

＊217**越方**

越方＝越の方術

方術＝方士が行う。不老不死を中心に、占い、医術、呪術など、現世利益を追求する。

＊218 **飛廉館（観）**

＊飛廉は風伯の名、風神を祭ったもの。

飛廉観在上林武帝元封二年作飛廉神禽能致風気者身似鹿頭如雀有角而蛇尾文如豹（三輔黄図）

「飛廉観は上林に在り。武帝元封二年に作る。飛廉は神禽で、能く風気を致す。身は鹿に似て、頭は雀の如し。角があり、蛇の尾、模様は豹の如し。」

＊219 **桂**

●淮南子曰く、月中に桂樹有り（太平御覧）

●説文解字　桂＝江南木、百薬之長

★桂＝肉桂。不死の仙人に結びつけられることが多い。

★肉桂の根の皮＝ニッキ

＊220 **鏡作神社**

●鏡作坐天照御魂神社（田原本町八尾）延喜式内大社

祭神は火明命＝天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊＝物部始祖（鏡作に関係しない）

★鏡作麻気神社（田原本町小坂）延喜式内社

祭神＝天糠戸命（鏡作氏の祖神、石凝姥命の父とされる）

●鏡作伊多神社（田原本町保津）延喜式内社

祭神は石凝姥命、岩屋戸に籠った天照大神を引き出すための鏡を作ったとされる。

●石見の鏡作神社（三宅町石見）は黒田郷で、鏡作郷から外れるためか、古い記録がない。

祭神は石凝姥命。

●孝霊神社（田原本町黒田）、祭神は孝霊天皇。別名は廬戸神社（元、鏡作神社の可能性あり。法楽寺内にあったものが現在地に移転した）

＊221 **法楽寺**

都村大字黒田ニアリ、地蔵仏を本尊トナス。弘法大師ノ創立ト伝フ。和州寺社記ニ法楽寺人王七代孝霊天皇の庿所也。この所はいにしへ黒田の都とて天皇住給ひし所なり。御歳百廿七歳にして崩御し給ひ此陵に葬り奉るよし、弘法大師開基し、堂塔を造立し給ふ。本堂の本尊は勝軍地蔵秘仏なり、其側に聖武天皇みづから作り給ふ地蔵菩薩の像あり。弘法大師の御願其坊舎二十五軒有たるよし、いつ比よりか衰微して今は一宇一坊にて真言宗也傍に天皇の社あり。毎年九月祭礼有。ト見ユ。但シ寺地ヲ以テ山陵トスルハ非ナリ。其ノ地黒田宮址ニ因ミ中古祠ヲ建テ孝霊天皇ノ御魂ヲ祭レル事跡ヲ謬リ伝ヘタルモノナルベシ。天皇ノ山陵ハ葛下郡片岡ニアリ。（大和志料）

＊222 **黒田廬戸宮**

孝霊天皇ノ皇居ナリ。都村ノ大字ニ黒田アリ、宮戸アリ、其ノ間ニ都杜・都前・内裏坪・大君等ノ字ヲ存ス。（大和志料）

＊223 **孝霊天皇時代とする伝承**

●鳥取県日野郡の鬼退治=出雲から大和へ向かう途中

●皇子、吉備津彦の吉備攻略（桃太郎の起源、岡山）

●皇子、稚武彦命が女木島の鬼を退治した。（香川）

●孝霊天皇時代に淺井姫命と気吹雄命が戦った。（竹生嶋縁起、近江）

●孝霊天皇時代、御上山に天御影神が降臨（神社伝承、近江）、出雲の御蔭大神（播磨国風土記）

★出雲の神が播磨、近江に進出している。

●阿蘇神社、孝霊天皇時代の創建

孝霊天皇の伝承は山陰、瀬戸内、滋賀、阿蘇に濃厚ということになる。

＊224 **崇神天皇（イリヒコ王朝）**

崇神天皇が正統後継者で豪族、領民の支持があるなら、四道将軍を派遣したり、大坂、山背から反乱が

起こったりという混乱はないはず。南の紀伊以外、全国が従っていない。紀の国造、荒河刀辨の娘が崇神天皇の妃となるなど、大和入りした通り道の紀伊は友好的なのである。

＊225 **木拊(弣)短弓**

和名抄では、拊とは弓の中央のことで、和名、由美都加(ゆみつか)となっている。倭人伝原文の拊はぎょうにんべんの様に見えるが、このような文字は存在しないため、拊の転写間違いと思われる。三国志集解では弣となっている。

＊226 **姫姓と呉**

呉の紀元、赤烏を記した鏡が出土している。

【山梨県三珠町狐塚古墳、赤烏元年(238)鏡】

赤烏元年五月廿五日丙午造作明竟百錬清銅服者君侯宣子孫寿万年

【兵庫県宝塚市安倉古墳、赤烏七年(244)鏡】

赤烏七年五月廿五日丙午時加日中造作明竟百錬幽■服者富貴長楽未央子孫富昌■■■■陽■■

★卑弥呼と同時期、狗奴国の一族が呉と連絡を取っていた可能性を感じさせる。これもコピーされ同盟国に配布されていたのかもしれない。呉王の孫権は、春秋時代の呉王闔廬(姫姓)の軍師だった孫武の後裔とされている。頼りたくなる縁というものがある。

●百済の姫姓

欽明 12 年(551)、百済の聖明王が日本に派遣した使者に西部姫氏達率怒唎斯致契の名がみえる。

＊227 **「つ」**

「つ」は「の」と同義。「末っ子」は「末つ子」の転訛＝「末の子」。「秀つ枝」は上の枝の意味。

＊228 **神賀詞(代替わりの時)**

続日本紀

霊亀二年(716)二月丁巳、出雲国々造外正七位上出雲臣果安斎竟奏神賀事

神亀元年(724)、正月戊子、出雲国造外従七位下出雲臣廣嶋奏神賀辞

天平勝宝三年(751)二月乙亥、出雲国造出雲臣弟山奏神賀事

ほか

＊229 **祭祀氏族**

神は他氏族の祭りを受けないとされるが、母系でつながっていればそれが可能になる。